

感動詞「ナンダベ」の形態・音調的特徴

勝又 琴那

1 はじめに

方言における感動詞研究は近年、隆盛傾向にある。もともと感動詞は、話者の心理的意味を表すことから理論的分析が困難であると考えられ、敬遠傾向にあった。しかし、現代日本語の特に談話研究において、談話標識としての機能（森山 1989）、心的操作標識としての機能（定延・田窪 1995）を持つことなど、それまで明確に機能が捉えられてこなかった感動詞が果たす役割に注目が集まり、その後、さらに研究は広まっていき、定延（2002）、富樫（2005）などの研究も現れてきた（小林・澤村 2017:90）という。方言学においても、そういった現代語研究の流れを受け、2020 年には、第 111 回日本方言研究会において、感動詞のシンポジウムが開催され、2022 年には、方言感動詞をテーマとした書籍（『全国調査による感動詞の方言学』、『方言の研究』8）が刊行されるなど、感動詞に対する関心は増えつつあると思われる。とは言うものの、現時点では、方言感動詞の研究を進めるに際して、最も基礎的な記述的研究の蓄積も十分ではないと思われる。以上のような現状を踏まえ、発表者はこれまで宮城県気仙沼市方言における感動詞、特に疑問詞に由来する感動詞（ナンダベ、ナニ等）を対象に記述的研究を進めてきた。具体的には、当該感動詞がどのような意味を持つのか、その意味を表す際にはどのような形態・音調で実現されるのかといったことであるが、これまでの記述は、高年層話者 1 名の結果をもととしたものであることから、個人差を排除しきれないという懸念点があった。そこで本調査では、気仙沼方言感動詞「ナンダベ」を対象とし、「ナンダベ」が表す意味と当該の意味を表すために用いられる形態的・音調的操作の対応を、多人数調査によって数量的に確認することを目的とする。

2 先行研究

気仙沼方言感動詞「ナンダベ」については、小林・勝又（2022）が詳しい。両氏は、小林・澤村（2017）の感動詞の捉え方^{注1}に則り、「ナンダベ」には「想定に反する事態が生じたことに対し、それをにわかには受け入れがたい感動を表す。」という基本義があるとし、それは基本形「ナンダベ」（アクセント相は [ナン (高) ダ (低) ベ (低)]）で表されるとした。そして、その基本形に長音化や疊語化などの形態的操作、イントネーションやストレスなどの音調的操作が加えられることで「驚嘆」（「ナン」の長音化＋山型のイントネーション）、「憤慨」（「ナン」の部分にストレス（声道摩擦））などの感情的意味が表現され、実際に使用されうるとした。両氏は上記の意味以外も含め、計 9 種の実現義があること^{注2}、そして、それと対応する形態的・音調的操作を明らかにした。しかし、同書では、限られた時間、および質問数での結果を基としているため、同調査による結果を気仙沼市方言「ナンダベ」の実現義、それに付与される諸操作として一般化してよいかについては、

検討の余地がある。当然、同話者に対して、各感情的意味が表出される場面を種類豊富に提示し、そこでの発話（発音）から、より精緻に各感情的意味と形態的・音調的操作との対応関係について記述するという方法もあるが、本調査では、多人数調査という特性を活かし、小林・勝又（2022）において明らかとなった実現義とそれにかかる諸操作が本当に一致しているのかを量的に確認することを目的とする。

3 調査内容

調査内容について、改めて示せば以下のようになる。

3.1 調査目的

小林・勝又（2022）において明らかとなった「ナンダベ」の実現義およびそれにかかる形態的・音調的操作が本当に一致しているのかを数量的に確認する。

3.2 調査対象

小林・勝又（2022）において明らかとなった「ナンダベ」の実現義のうち、他の感情的意味と複合せず、単独で表出していると考えられたもの。すなわち、「驚嘆」、「憤慨」、「あきれ」、「狼狽」の4種を本調査の対象とする。ここで、複合的なものを除外したのは、調査時間の短縮および「ナンダベ」の再現発話の際に話者の混乱を避けるためである。

3.3 調査対象者

本調査における話者は計83名であり、その内訳は以下に示す通りである。

表1 本調査における話者の年代層と性別の内訳

年代層 性別	高年層	中年層	若年層	少年層	総計
女性	11	15	13	10	49
男性	11	5	8	10	34
総計	22	20	21	20	83

3.4 調査方法

調査は、一問一答形式で、「ナンダベ」を日常的に使用するか否かを確認する前提質問を含め、計5問の質問項目を用意した。流れは以下のとおりである。

- ① 使用者（予想：高年層・中年層）の意見と非使用者（予想：若年層・少年層）の意見で分けるため、普段から「ナンダベ」を使用するか否かを質問により、確認した。
- ② 「驚嘆」、「憤慨」、「あきれ」、「狼狽」という感情的意味が表出するであろう場面を調査者が読み上げ、提示し、その場面でどのような形態・音調での「ナンダベ」がみられるか（小林・勝又2022における分析通りの結果が得られるか）を調査・記録した。
- ③ 予想と異なる語形での回答の場合には、予想語形での発音が可能であるか否かを確認し、可能な場合にはその語形での発音を促したうえで、記録した。一方、予想語形での発音が当該場面に適さない、あるいは聞いたことがない場合には発音を促さず、次の質問項目へ進んだ。

尚、本調査では、「ナンダベ」使用者以外にも可能な限り「ナンダベ」を発音してもらう形をとった。これは、調査方式の単純化・効率化に加え、各感情的意味と諸操作の結びつきには、特定の形式（ここにおける「ナンダベ」）を超えた役割があるという、田窪・金水（1997）の指摘を参考に、「ナンダベ」を使用しない話者にも共通した操作が見られるかを確認する試みによるものである^{注3}。

4 調査結果

本節では、前節で示した流れのもと行った調査の結果を、調査対象である「驚嘆」、「憤慨」、「あきれ」、「狼狽」という感情的意味ごとに示す。尚、本論では、話者 83 名の内、「ナンダベ」使用者（使用していたことがあるという回答も含め、「ナンダベ」を使用すると回答した話者）である 59 名を対象とする。各年代ごとの「ナンダベ」使用者の内訳は表 2 の通りである。

表 2 各年代における「ナンダベ」使用者数

使用者数／年代層	高年層	中年層	若年層	少年層	総計
使用者数	18	16	18	7	59

また、本論では「ナンダヤ」「ナンダイ」など「ナンダベ」に類似すると思われる形式を除外し、「ナンダベ」による回答のみを考察対象とする。

「ナンダベ」における各感情的意味に対応する形態的操作、音調的操作を小林・勝又（2022:347）をもとにまとめると表 3 のようになる。表における矢印はそのあたりで高くあるいは低く発音されること、下線はその上がり下がりが顕著な場合を示し、下線を引いた文字はその部分にストレスがかかっていることを表す。

表 3 感情的意味と諸操作の対応

感情的意味	形態的操作（形）・音調的操作（音）	実現形
驚嘆	形：「ナン」部分の長音化 音：山型のイントネーション	ナ↑ーン↓ダベ
憤慨	音：「ナン」部分にストレス（声道摩擦） ときに「ナン」の部分を非常に高く発音する	ナン↓ダベ
あきれ	形：「ベ」部分の長音化 音：「ナンダ」部分の沈み込み +「ベー」で急上昇のイントネーション	ナ↓ンダ↑ベー
狼狽	形：疊語化	ナンダベナンダベ

4.1 「驚嘆」

「驚嘆」の「ナンダベ」の質問文は以下の通りである。尚、一部、便宜上表記を改めている。

まず、すごく驚いたときの「ナンダベ」の言い方について教えてください。例えば、あなたが前から欲しいなと目を付けていた洋服が、これまでとは比べ物にならないほど高い値段で売られていたとします。このとき、「昨日まで安かったのに、今日はどうしてこんなに高いの。驚いたな。」という気持ちで「ナンダベ」を言うとどのようになりますか？

表 4 に、「驚嘆」の場面における、実現形での「ナンダベ」の回答率を示した。回答率の括弧内には各年代における「ナンダベ」使用者数と「ナンダベ」回答者数^{注4}の実数を示している。尚、回

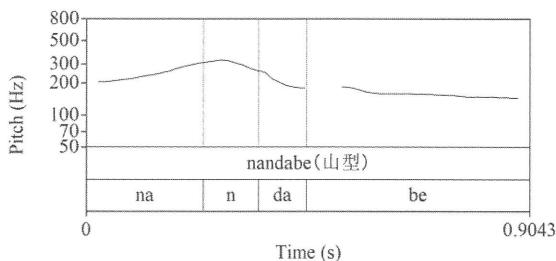
答者数には、自発的な発話と誘導による発話の両方を併せて示し、割合は全て、小数点第一位を四捨五入している。

表4 各年代における「驚嘆」^{注5}の回答率

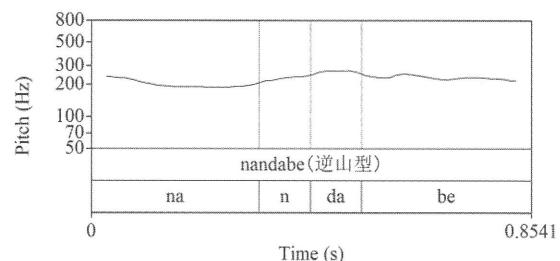
回答率／年代層	高年層	中年層	若年層	少年層	総計
回答率 (回答者数／使用者数)	44% (8／18)	25% (4／16)	39% (7／18)	14% (1／7)	34% (20／59)

表4に示したように、「驚嘆」における全体の回答率は、本調査4項目の中で、4.2節の「憤慨」、4.4節の「狼狽」に次いで、2番目に高くなっている。しかし、同率で回答率が最も高い「憤慨」「狼狽」と比較するとその回答率は約半数と特段高くはなく、一方で最も回答率が低い4.3節「あきれ」と比べれば約5倍ほど回答率が高くなっていることから、多いとも少ないとも言えず、「ナン」部分の長音化+山型のイントネーションという操作が「驚嘆」という感情的意味と対応するか否かを明らかにするには、さらなる調査を要すると思われる。尚、興味深い回答として、「驚嘆」の型（以降、各感情的意味に対応する形態的・音調的操作をまとめて「型」と言う。）の言い方では「がっかり感が入る」という内省を6名（高年層：3、中年層：2、若年層：1）から得、内、2名には、「驚嘆」の山型のイントネーションとは反対の逆山型イントネーションでの発話が確認できた。(1) (2)は音声解析フリーソフト Praat (6.4.23ver.) を用いて、山型および逆山型のピッチ曲線を描いたものである。本調査においては、逆山型のイントネーションがみられたのが2名のみとデータが少なかったため、今後、さらなる調査によって、逆山型のイントネーションと感情との関わりについて考察が必要となる。

(1) 山型イントネーション



(2) 逆山型イントネーション



4.2 「憤慨」

「憤慨」の「ナンダベ」の質問文は以下の通りである。尚、一部、便宜上表記を改めている。

次に、憤慨したときの「ナンダベ」の言い方について教えてください。例えば、あなたのお気に入りの洋服を「高かったから絶対に汚したりしないでね」と念を押していたにも関わらず、家族に汚されてしまったとします。このとき、「あれほど言っておいたのにどうして汚してしまったの！もう頭にきた。」という気持ちで「ナンダベ」を言うとどのようになりますか？

表5に、表4同様の方法で、「憤慨」の「ナンダベ」の回答率を示す。

表5 各年代における「憤慨」の回答率

回答率／年代層	高年層	中年層	若年層	少年層	総計
回答率 (回答者数／使用者数)	89% (16／18)	75% (12／16)	44% (8／18)	0% (0／7)	61% (36／59)

表5に示したように、「憤慨」における全体の回答率は、本調査4項目の中で4.4節に示す「狼狽」と同率で最も高くなっているが、高年層よりも中間層（中年層や若年層）での回答率が高くなっている「狼狽」と異なり、年代が上がるにつれて、回答率も高くなっています。高年層、中年層の年代では7割を超えており、この傾向の一つの要因として、「憤慨」のような怒りを相手に向けるあるいは叱るといった意図での発話が年代が上がるにつれて可能な場面が多い一方で、年代が下がるほど可能な場面が少ない（それを向けることができる相手が少ない）ということが考えられよう。例えば、叱るという場面は目上が話し手、目下が聞き手であることが一般的であるため、年代が上がるにつれて叱る（ことができる）相手は多く、下がるにつれて相手は少なくなる。したがって、それと比例する形で「憤慨」の使用頻度も増減するため、年代の上下で回答率が異なったということは考えられる。事実、上記以外の「憤慨」の場面として、「子どもがいたずらしたとき」（高年層・男性）や「子どもが服を汚してきたとき」（中年層・男性）など、自身より目下の者を咎める際に使用する回答があったこともこれを裏付ける。以上の仮説に沿って考えれば、主に「憤慨」の「ナンダベ」を使用すると思われる高年層、中年層における回答率の高さから、「憤慨」と「ナン」部分にストレス（声道摩擦）」がかかるという音調的操作との対応は一定程度支持できると思われる。尚、「憤慨」の「ナンダベ」を使用される側である少年層（若年層）においては、今後、「憤慨」の「ナンダベ」の発話ではなく「憤慨」音声の聞き取りによって「憤慨」の感情をくみ取ることができるかという調査を行うことで確認することも視野に入れたい。

4.3 「あきれ」

「あきれ」の「ナンダベ」の質問文は以下の通りである。尚、一部、便宜上表記を改めている。

次に、あきれたときの「ナンダベ」の言い方について教えてください。例えば、あなたが、洗濯していた服を洗濯機から取り出すと、いくつかの服にティッシュのカスがついているのを見つけたとします。このとき、「またか。ポケットの中身を確認するようにいつも言っているのに、どうして確認しないのかな。本当にあきれる。」という気持ちで「ナンダベ」を言うとどのようになりますか？

表6に、表4同様の方法で、「あきれ」の「ナンダベ」の回答率を示す。

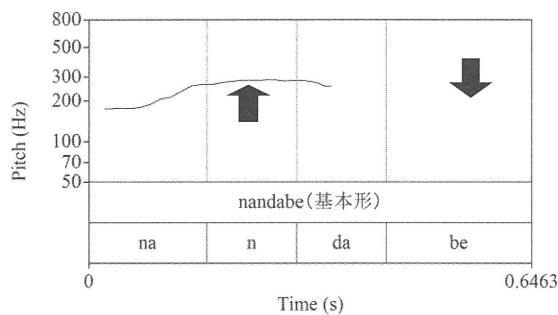
表6 各年代における「あきれ」の回答率

回答率／年代層	高年層	中年層	若年層	少年層	総計
回答率 (回答者数／使用者数)	11% (2／18)	6% (1／16)	6% (1／18)	0% (0／7)	7% (4／59)

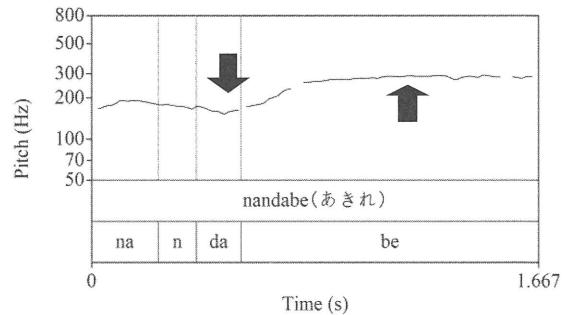
表6に示したように、「あきれ」における回答率は、本調査4項目の中で最も低く、多くの年代層で1割を下回る。ここから、2つの仮説を提示することができる。1つは、「ナンダベ」によって「あきれ」の感情を表すことがそもそも（多く）ないという仮説ともう1つには、他3項目の型に

比して、「あきれ」の型が最も廃れている（廃れやすい傾向にある）という仮説である。1つ目の仮説に関しては、本調査における回答者数の少なさおよび小林・勝又（2022）における個人差の排除不足という難点を踏まえれば考え得るものであるが、表6に示したように、4名の「あきれ」の実現形使用者がいたことや当該の形態・音調での使用を耳にしたという情報提供を6名から（高年層：1中年層：1、若年層：2、少年層：2）得たことから、「あきれ」を表現するための諸操作として上記の操作は不適格ではないと仮定し、考察を進める。次に、2つ目の仮説に関しては、「ナンダベ」のアクセント相との関わりが手がかりとなると思われる。「ナンダベ」のアクセント相は〔ナン（高）ダ（低）ベ（低）〕で表されるとすでに述べたが、「あきれ」の型は、他3項目の型の中で最もアクセント相から離れた型、つまり、最も「ナンダベ」の基本的な言い方から離れた言い方を必要とするものであるということが言える。それは以下の（3）と（4）を見るとより明らかとなる。（3）（4）は、小林・勝又（2022）における話者の基本形、すなわちアクセント相による「ナンダベ」と「あきれ」の「ナンダベ」のピッチ曲線を描いたものである。

(3) 「ナンダベ」：基本形



(4) 「ナンダベ」：あきれ



(3) (4) に上向き矢印で示したように基本形の「ナンダベ」の音の高さのピークが「ン」にあるのに対して、「あきれ」のピークは「ベ」であり、反対に、下向き矢印で示したように、ピッチ曲線は途切れているが、音声上、基本形の「ナンダベ」の低さのピークは「ベ」である一方で、「あきれ」の低さのピークは「ン」から「ダ」にかけてであるというように、音の高低のピークがほぼ真逆くなっている。このように、「あきれ」の型は基本的な「ナンダベ」の言い方に大きな変形を加えなければならないという特徴がある。一方で、音調的操作を伴って実現される「驚嘆」、「憤慨」は、山型のイントネーションやストレスの付与によって「ナン」部分の高さが強調されることがあるが、〔ナン（高）ダ（低）ベ（低）〕というアクセントを大きくは変えずに実現可能である。以上のようなアクセント相との乖離度から、「あきれ」の型が「ナンダベ」になじまず、使用数が減少し、全年代を通して最も回答率が低くなった可能性が考えられる。以上から、本調査によって、数量的に「ベ」部分の長音化、「ナンダ」部分の沈み込み+「ベー」で急上昇のイントネーション」という形態的・音調的操作が「あきれ」という感情的意味と対応するか否かのみでなく、「あきれ」という感情を「ナンダベ」が表すか否かも含め、検討の余地があることが示唆されたため、今後「憤慨」と同様に聞き取り調査を行うなど、引き続き考察を進めたいと考える。

4.4 「狼狽」

「狼狽」の「ナンダベ」の質問文は以下の通りである。尚、一部、便宜上表記を改めている。

さいごに、慌てたときの「ナンダベ」の言い方について教えてください。例えば、あなたが洗濯物をそろそろ取り込もうかと思っていると、急に土砂降りの雨が降ってきたとします。そのとき、「晴れていたのにどうしてこんなに降ってくるの。早く取り込まないと！」と慌てる気持ちで「ナンダベ」を言うとどのようになりますか？

表7に、表4同様の方法で、「狼狽」の「ナンダベ」の回答率を示す。

表7 各年代における「狼狽」の回答率

回答率／年代層	高年層	中年層	若年層	少年層	総計
回答率 (回答者数／使用者数)	56% (10／18)	75% (12／16)	67% (12／18)	29% (2／7)	61% (36／59)

表7に示したように、「狼狽」における全体の回答率は、本調査4項目の中で「憤慨」と同率で最も高くなっているが、年代層と回答率が比例する「憤慨」とは異なり、中年層や若年層といった中間層での回答率が7割前後と高くなっている点が特徴的である。また、使用はしないもの、繰り返す言い方を聞いたことがあると回答した者が6名（中年層：2、若年層：3、少年層：1）みられたことや、「慌てたとき、焦ったときには繰り返して言う」という内省が使用者8名（高年層：2、中年層：4、若年層：2）から得られたことから、狼狽すなわち焦る場面では「ナンダベ」は繰り返して用いられることが慣用化していると思われる。したがって、「狼狽」という感情的意味に対応する形態的操作として「疊語化」が起こるという、小林・勝又（2022）の主張はおおむね肯定できると思われる。また、同場面において、(5) (6) のように「ナンダベ」以外の形式で疊語形式を用いた者が「ナンダベ」不使用者2名も含め、8名（高年層：4、中年層：3、若年層：1）いることから、「狼狽」と「疊語化」という関係は、「ナンダベ」に限らず普遍的に対応する可能性がある。

(5) ナント ナント。 (若年層・女性)

(6) ナンダベ ナンダベ ハヤグ ハヤグ イレナイド イレナイド。 (高年層・女性)

5 おわりに

本調査における目的は小林・勝又（2022）における「ナンダベ」の表す感情的意味と諸操作の対応関係を数量的に確認することであった。結果として、「憤慨」「狼狽」において概ね対応を確認することができたが、「驚嘆」「あきれ」においては、本調査のみでは確認しきれない点があったため、幾度か言及したような聞き取り調査などの追加調査も検討し、さらに考察を深めていきたい。また、4.1節の「驚嘆」において、小林・勝又（2022）ではみられなかった逆山型の音調も見られたため、その点も引き続き分析を進めていきたい。

注

- 1 小林・澤村（2017:128-129）では、当該感動詞の基本的な形態を「基本形」（ここにおける「ナンダベ」）と置き、実際に表出された姿を「実現形」（例：ナーンダベ、ナンダベー）とした。基本形がいわば人間の脳裏に蓄積された抽象的な姿であるのに対して、実現形は現実に音声として発話された具体的な形態のことを指す。そして、当該感動詞の実現形すべてに共通する意味を「基本義」と置き、この基本義に何らかの意味的なものが加わって実際の語の意味が生み出されると考え、その実際の意味を「実現義」と置いた。また、実現形のバリエーションのちがいは、場面に依存した発話者の感情（感情的意味）の異なりを表すとし、基本形から実現形を導き出す操作である、「形態的操作」「音調的操作」と基本義から実現義を導き出す際に付与される何らかの意味的なもの、すなわち「感情的意味」は対応するとした。
- 2 【基本義】、【驚嘆】、【憤慨】、【驚嘆+憤慨】、【あきれ】、【あきれ+憤慨】、【あきれ+落胆】、【あきれ+落胆+憤慨】【狼狽】の9種。（小林・勝又 2022:342-347）
- 3 例えば、小林・澤村（2017:105）には、「摩擦化」が「抗議の気持ちを込めて驚くときなど」にみられることや「鼻音化」が「疑いや軽蔑の気持ちを込めて驚くときなど」にみられることが述べられている。
- 4 「回答者数」には、質問文に対する回答のみでなく、各感情的意味が表出される場面で使用された場合の回答者数を示している。したがって、質問文に対して「ナンダベ」が不回答な場合も、話者が「こういう場面では「ナンダベ」を使用する」と提示した場面が「驚嘆」「憤慨」「あきれ」「狼狽」に類する場面の場合には、「回答者数」に加算している。
- 5 「驚嘆」の回答には「驚嘆」のみを表すもの、すなわち「ナン」部分の長音化+山型のイントネーションという形態的・音調的操作が加わっているものと、「驚嘆」を表す諸操作に「憤慨」を表す音調的操作（「ナン」部分にストレス（声道摩擦））が組み合わさった「驚嘆+憤慨」と表記できるものも、「驚嘆」の諸操作が表現されている点を考慮し、含めている。また、これは「憤慨」においても同様である。「驚嘆」における「驚嘆+憤慨」の回答者数は4（高年層：1、中年層：1、若年層：2）、「憤慨」における「驚嘆+憤慨」の回答者数も4（高年層：1、中年層：2、若年層：1）である。

文献

- 小林隆・勝又琴那（2022）「感動詞「ナンダベ」の用法と地理的分布」小林隆編『全国調査による感動詞の方言学』pp.335-366,ひつじ書房
- 小林隆・澤村美幸（2017）「感動詞の方言学」小林隆・川崎めぐみ・澤村美幸・椎名涉子・中西太郎『方言学の未来をひらく一オノマトペ・感動詞・談話・言語行動一』,pp.87-205,ひつじ書房
- 定延利之（2002）『「うん」と「そう」の言語学』ひつじ書房
- 定延利之・田窪行則（1995）「談話における心的動作モニター機構」『言語研究』108
- 富樫純一（2005）「驚きを伝えるということ—感動詞「あっ」と「わっ」の分析を通して—」串田秀也・定延利之・伝康晴『シリーズ文と発話1活動としての文と発話』ひつじ書房
- 日本方言研究会編（2022）『方言の研究』8,ひつじ書房
- 森山卓郎（1989）「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1,p.63-88

使用ツール

Boersma, Paul & Weenink, David (2024) . Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 6.4.23, retrieved 27 October 2024 from <http://www.praat.org/>
(2025/01/01 確認)

あいさつ表現の変化

中西 太郎

1 先行研究及び目的

本稿では、気仙沼市のあいさつ表現の世代別の調査結果をもとに、その使用実態の変化について報告、考察する。あいさつ表現の変化を見るときに重要な視点として「定型化」がある（沢木・杉戸 1999 他）。あいさつ表現は、あいさつらしくなるほど、「定型化」の特徴が顕著になることが指摘されている（中西 2008 他）。日本語あいさつ表現の「定型化」の過程について、言語地理学的な観点から明らかにしたものには、三井（2006）がある。三井（2006）は、方言文法全国地図第 349 図（朝）、350 図（晩）の出会いのあいさつ表現の分布を分析し、地理的周縁部に非定型表現が存し、中央部に定型的表現が分布することから周囲分布を推定し、日本語の出会いのあいさつ表現に非定型から定型へと変わっていく定型化の流れがあることを指摘した。

さらに、本稿で対象とする気仙沼市のあいさつ表現の近年の使用実態を報告したものには、中西（2012、2019）がある。中西（2012）では、気仙沼市を含む南三陸地方の朝の出会いのあいさつ表現について、2007 年の地理的分布調査の結果をもとに待遇的場面別の使用実態を明らかにした。その結果、朝の出会いの場面においては、心理的に親しい相手への表現になるほど、「ドゴサイク」のような行先尋ねなどの非定型表現を併用しているということが分かった。加えて、若年層で気仙沼周辺地域に定型的な表現が広まっていることも明らかにした。中西（2019）では、気仙沼市高年層に対して、出会いの場面も含む 44 の様々な場面の聞き取り調査を行い、気仙沼市の定型化に関する特徴は、定型的表現と非定型表現が混在する定型・非定型中間地域としての性格を持つことを明らかにした。これらの成果は、世代別の観点や、待遇的、場面横断的な観点で調査、分析することによって、あいさつ表現の定型性に関する知見を深化させる方向性を見出したものと言える。ただし、いずれも多人数の調査による検証という課題を残すものであった。

そこで、本稿では、気仙沼市に焦点を当て、待遇的場面差と世代差に注目して多人数調査を行うことで、近年の使用実態の変化を把握するとともに、これまでに得た定型化の知見を検証し、気仙沼市における定型化の変化がどのように進んでいるかを明らかにする試みを行う。

2 調査の概要と定型化判断の手法

本稿で用いるデータは 2024 年度東北大学日本語学研究室で行った気仙沼市方言調査の結果である。話者数は表 1 の通りである。調査項目は、様々なあいさつ場面の中でもっとも変化が進んでいくと予想される朝の出会いの場面とし、場所と相手を（A）（1）～（7）のように設定した。調査項目には、調査場面とともにその場面で現れ得る典型的な定型的表現^{注1}（「 」）も合わせて記した。

表1. 2024年度気仙沼方言調査あいさつ表現調査話者数内訳

性別	高年層 (60代以上)	中年層 (40~50代)	若年層 (20~30代)	少年層 (10代)	総計
男性	11	5	8	10	34
女性	11	15	13	10	49
総計	22	20	21	20	83

(A) 調査場面の質問設定（以下、場面の説明は、会う場所と相手）

- 朝、居間で、 (1) 両親に：「オハヨー（ゴザイマス）」
- 朝、道端で、 (2) 最も目上の人に：「オハヨーゴザイマス」
- 以下、同様 (3) 対等よりやや目上の人に：「オハヨーゴザイマス」
- (4) 同年代の親しい人に：「オハヨー」
- (5) 顔見知り程度の同年代の知人に：「オハヨー（ゴザイマス）」
- (6) 目下のものに：「オハヨー」
- (7) 見知らぬ人に：「オハヨーゴザイマス」

本稿では、それぞれの場面で回答された表現様式のバリエーション、とくに、それらが定型性の観点から見てどのような性質を持つかを中心にして使用実態の特徴を見る。

なお、定型化の変化の度合いを測るにあたって、定型化を測る基準には、I. 実質的意味の有無、II. 形式の固定度、III. 場面とことばの結びつきの強さの3つの観点がある（中西 2008）。ただし、今回の調査では、回答として得られた個別の表現ごとに、意味の希薄性を確認するまでには至っていない。そのため、本稿では便宜的に、まずIIの形式の固定度の観点に注目し、話者の回答に形式が固定化しているあいさつ表現が含まれているかを定型化の判断基準としたことにした。このように観点が網羅的ではなく、不十分である点を差し引いても、世代別多人数の使用実態をもとに、待遇的場面別の定型化の進度の実態を明らかにする試みは、今後、気仙沼市のあいさつ表現の定型化がどのような条件で進んでいくかを探るという面において、一定の意義があるものと考えられる。

3 気仙沼市のあいさつ表現の使用実態

以上のような問題意識で、本節ではまず場面ごとの定型的表現の年齢別使用実態を示す。なお、各場面で得られた表現は多種多様だが、気仙沼方言のあいさつ表現の定型性を判断するという目的にもとづいて(8)のように分類し、記号に置き換えて全体の特徴を示す。各分類のあとの中には分類した表現を具体的な言語形式や表現内容、行動様式で示した。「定型的表現」については、前節で述べた定型化の基準IIの形式の固定度の観点から定型化を判断する際、表現形式の一部が俚言形、ないし常体・敬体の区別が判断基準語形と異なっても、内容的に共通語の定型的表現と一致すれば定型的表現とみなすこととする。例えば、朝の出会いの表現として、「オハヨーゴザリス」（下線は俚言）と回答されたときも、共通語「オハヨーゴザイマス」相当の定型的表現とみなしひ「定型

的表現」とするということである。「準定型表現」は、定型的表現に比して形式の固定化の度合いが低い表現を分類している。具体的には、副詞などの修飾成分が共起しうるなどの点で（「タイヘンオツカレサマデス」「ズイブンオヒサシブリデス」など）固定化の度合いの差が考えられるものである。ただし調査において、その都度、修飾成分の共起について確かめた結果ではなく、共通語の同一表現の性質から「準定型」とみなした分類であることは注意を要する。「非定型表現」は、実質的な意味を持つ表現、「呼びかけ」は、注意喚起の機能を主として持つ形式を分類している。「ドーモ」については、先行研究（中西 2011 他）で、東日本を中心にして特定の場面で顕著に用いられる地域特有の形式と捉えられ、定型化している可能性があるため別分類として扱うこととした。その他に「身振り」や「何もしない」といった言語形式ではない行動様式もあるが、これはあいさつの言語形式と等価の機能を果たすこともある「身振り」や「何もしない」も射程に入れ、あいさつを言語行動とみなして研究することが重要という筆者の立場にのっとったものである。

- (8) ●：定型的表現（オハヨーゴザイマス、コンニチワなど）
◎：準定型表現（オセワサマ、オツカレサマ、オヒサシブリなど）
／：非定型表現（天気、行き先尋ね、調子伺いなど）
△：呼びかけ（オー、オッス、センセー、ヤッホーなど）
▲：ドーモ
◐：身振り（会釈、手を振るなど）
×：何もしない
－：無回答（時間制限などにより調査不能だったもの）

以上のような方針で年齢別の使用実態の詳細を示したのが次頁図 1 である。図中、縦軸には、各話者を年齢順に並べている。「90M」等の各話者のラベルは調査当時の話者の年齢（90 歳）と、性別（M は男性、F は女性）を表している。横軸には、左から順に、これまでの調査成果から心理的な距離が近いと目される、両親、同年代の親しい人（図中、「同親」。続く相手のあとに（）内は図中の略称）、目下のもの（「目下」）、顔見知り程度の同年代の知人（「同疎」）、対等よりやや目上の人（「やや目上」）、最も目上の人（「最上」）、見知らぬ人（「未知」）の順で相手を並べて配した。なお、記号化にあたっては、回答される表現様式の種類の異なりを示すことを重視した。そのため、同一分類の複数の表現が回答されても、図にはその多寡が反映されていない（ある場面で「オー（△）」、「オッス（△）」と回答されても表示は「△」1 つのみ）。そして各場面の表現別の出現割合（出現割合 = 当該表現回答数／各場面有効回答総数）を示したものが次々頁の図 2 である。なお、複数の分類の表現が回答されることもあるため、図 2 では、各場面の列総計は 100%を超えることもある。

図 1 及び図 2 を見ると、気仙沼市における定型化の実態がよく分かる。定型的表現（●）は、ほぼ全場面に行きわたっている（84.7%）。特に場面別に見ると、最も目上に対する場面では 95%を超える浸透率となっている。最も低い場面は「未知」が 65.3%だが、この値には「何もしない（×）」

の割合の高さが影響している。「何もしない」を除いた言語形式の回答の中での定型的表現の割合は 90.7% (49/54) となり、目上の相手に次いで高い値と言える。その他の場面はいずれも 80% を超えており、朝の出会いの場面だけを見た場合、現在の気仙沼市は定型的表現使用地域と言つてよ

年齢・性別	両親	同親	目下	同疎	やや目上	最上	未知
90M	●	●/	●/	●	●/	●	●
86F	/	/	●/	/	●	△	×
86M	-	●/	-	-	●/	●/	-
81F	-	●/	-	-	●φ	●◎/	-
79M	/	/	●/	/	●/	●/	●
77M	●/	●/	●/	●/	●/	●/	●
76M	×	/	/	●	●/	●/	●
76M	●/	/	●/	●/	●	●/	●φ×
76M	●/	●	●/	●	●	●/	●
76M	●/	●/	●/	●	●/	●/	●×
74F	●	●/	●	●◎/	●	●/	●
74M	●	●/	●/	●/	●/	●/	●
74M	●×	●	●	●	●φ	●	φ×
72F	●	●φ	●φ	●φ	●φ	●φ	●φ
71M	●/	△○	△/	●φ	△	●/	▲φ
70F	-	●/	-	-	●/	●/	-
70F	●	●	●	●φ	●φ	●	●φ
69F	●	●/	-	-	●/	-	-
67F	-	●/	-	-	●/φ	●/	-
67F	●	●	●	●	●φ	●φ	●φ
67F	●	●/	●/	●	●/	●/φ	φ
60F	●	●/	●/	●/φ	●/φ	●/φ	●
59M	×	△/φ	●φ	●φ	●φ	●φ	×
58F	●/	●/	●/	●/φ	●◎/	●◎/	●×
58F	●/	●/φ	●φ	●φ	●φ	●/φ	●
58F	●	●	●	●	●φ	●φ	●
57F	●	●	●φ	●φ	●φ	●φ	●φ
56F	●	●	●	●φ	●φ	●	●φ
55M	●	●	●	●φ	●	●	●×
54F	●	▲●	/	▲●φ	▲●◎φ	▲●φ	φ
54M	●	●/	△○/	△○φ	△●/φ	●φ	●φ×
54M	●	●	●φ	●	●φ	●φ	●×
51F	●	●/	●/	△/φ	◎/	◎/	●
50M	×	●φ	●	●φ×	●φ	●φ	●
48F	●	●	●	●	●	●/	●×
47F	×	●	●/	●/φ	●φ	●/	●×
47F	-	△●/φ	-	-	▲◎φ	●/φ	-
46F	-	▲●φ	-	-	▲●φ	▲●φ	-
45F	●	●	●/	●φ	●φ	●φ	×
42F	●	●φ	●	●	●φ	●φ	●φ
41F	●	△φ	●φ	●φ	●φ	●φ	●φ
40F	●	●	●φ	●φ	●	●φ	×

年齢・性別	両親	同親	目下	同疎	やや目上	最上	未知
39F	●	●	φ	φ	●φ	●φ	×
39M	●/	▲●/φ	▲●/	▲●/φ	▲●φ	●◎φ	●φ
39M	●	●	●	●φ	●	●φ	●
38F	●	●	◎/φ	/φ	●◎φ	●◎φ	●
38F	●	●	×	φ	●	●φ	×
38F	●	△φ	●φ	●	●φ	●	●
38F	△●/×	▲●/	●/	●◎	▲●◎φ	▲●φ	●
37M	●	/	/	◎/	●	▲●	●
36F	●×	◎φ	●φ×	▲●φ	●/φ	●/	×
36M	●	△●φ	△●φ	●φ	●	●φ	●
33M	●	●	▲●	●◎	●φ	●φ	▲●φ
32M	×	●	●	△●φ×	●φ	●◎	●φ
31F	●	●φ	●	●φ	●φ	●φ	●
30M	×	●	●φ	●	△●φ	●φ	×
29F	●	△●	●	●φ	●φ	●	●φ×
29F	△●φ	●	●	●	●	●φ	×
29F	●	●	●	●	●	●φ	●
25M	●/	▲●	●φ	●	●◎φ	●◎φ	●◎
24F	●	△●φ	●◎φ	●	●◎/φ	●/φ	×
22F	●	●○	●φ	●	●φ	●φ	×
21F	×	●	△×	●	●	/	×
18F	●	●	●	×	●φ	●φ	×
17F	●	●	●	●	●	●	×
17M	●	●	●	●	●φ	●φ	●
16F	●	●	●	●	●	●	φ×
16F	-	●	-	-	●φ	●φ	-
16F	●	●◎	●	●	●	●φ	×
16F	●	●	●	×	●φ	●φ	●
16F	●	●	●φ	●φ	●φ	●φ	φ
16F	●	●	●	●φ	●φ	●φ	φ
16F	●	●	-	●	●φ	●	●
16M	●	●	●	●×	●	●φ	●φ
16M	●	●	●	●	●φ	●φ	●
16M	●	△φ	/	●φ	△φ	●φ	×
16M	●	△φ	△φ	△●φ	●φ	●φ	●φ
15F	●φ	●/	●	×	●φ	●φ	●×
15F	●	●	●	●	●φ	●φ	×
15M	●	△	φ	φ	△φ	●φ	×
15M	●	●	●	●	●	●	●
15M	●	φ	×	×	●φ	●φ	×
15M	●	●	●	●	●φ	●φ	●
15M	●	●	●	●φ	●φ	●φ	●φ

「年齢・性別」は、数字が年齢、アルファベットが性別(M:男性、F:女性)を示している。

記号凡例

●: 定型的表現(オハヨーゴザイマス、コンニチワなど)

▲: ドーモ

◎: 準定型表現(オセワサマ、オツカレサマ、オヒサシブリなど) φ: 身振り(会釈、手を振るなど)

/: 非定型表現(天気、行き先尋ね、調子伺いなど)

×: 何もしない

△: 呼びかけ(オー、オッス、センサー、ヤッホーなど)

-: 無回答(時間制限などにより調査不能だったもの)

図1 2024年気仙沼市あいさつ表現調査 調査結果

	両親(76)	同親(83)	目下(74)	同疎(75)	やや目上(83)	最上(82)	未知(75)	全場面(548)
● : 定型的表現	88.2%	83.1%	82.4%	82.7%	94.0%	95.1%	65.3%	84.7%
◎ : 準定型表現	0.0%	2.4%	4.1%	6.7%	9.6%	9.8%	1.3%	4.9%
／ : 非定型表現	15.8%	31.3%	31.1%	17.3%	20.5%	29.3%	1.3%	21.2%
△ : 呼びかけ	2.6%	13.3%	5.4%	2.7%	4.8%	1.2%	0.0%	4.4%
▲ : ドーカー	0.0%	6.0%	4.1%	6.7%	7.2%	4.9%	4.0%	4.7%
φ : 身振り	2.6%	20.5%	25.7%	44.0%	61.4%	59.8%	29.3%	35.2%
× : 何もしない	13.2%	0.0%	5.4%	9.3%	0.0%	0.0%	41.3%	9.5%

場面名のあと()内の数値は、無回答を除いた有効回答総数。棒グラフは使用率を各セル内の占有率で示したもの。

図2 待遇的場面別の表現出現割合(全世代)

い様相と言える。場面間の定型的表現の浸透度について見ると、最上=やや目上>両親>同親=同疎=目下の順になっている。年齢的上下の関係に沿った浸透度と言える。準定型表現(◎)は、目上(最上、やや目上)の相手に対して高く、同疎>目下>同親>未知>両親の順に値が減じる。未知の相手を除けば、心理的な距離の遠近に対応する順と言える。非定型表現(／)は、同親=目下=最上>やや目上>同疎>両親>未知の順になっている。親しい相手に対して、「ドコサイグノー」のように問いかける気の置けない間柄でよく交わされる表現が行われる一方、目上の相手に対しても「アサハヤイデスネー」「ドゴカニイクノスカ」のように同様の声掛けが盛んに行われている。一見、同質の会話が交わされているように見えるが、例えば、同年代の親しい相手には「オッス」「ヨー」などの気軽な呼びかけ(△)を伴っているのに対し、目上には「オハヨーゴザイマス」などの定型的表現のあとにこれらの非定型表現を伴っていることが多い。これは、前者が親しい相手と実質的な会話に入っていく流れの中での表現の表れであるのに対し、後者は気遣いの面から定型的な表現に添える表現の表れとも取れる。いずれであれ、気仙沼市が単純な定型的表現のみのあいさつを志向する地域とは言えないことが指摘できる。動作(φ)に関しては、目上の相手に対する値が高いが、それらは「お辞儀」や「会釈」が顕著であり、動作を伴ってしっかりとあいさつする意識が強いことが窺える。同疎、未知には「会釈」、同親、目下には「手を振る」「手を上げる」などが用いられており、相手との関係によって動作の種類を変える意識がはつきりあるとも言える。最後に「何もしない」については、未知が最も高く、両親>同疎>目下>最上=やや目上=同親の順となっている。両親を除けば一定の関係性を構築する相手には「何もしない」は選択されないとすることが表れている。両親に関しては、関係性の構築を必要としない認識の表れと思われる。

4 気仙沼市の定型的あいさつ表現の使用実態と世代差

本節では使用実態の世代差について数量的な把握にもとづいた分析を行う。次頁図3に示すのは、世代別の表現出現割合である。定型的表現については、各世代の全場面平均で見たとき、最も高い値が中年層の87.9%、最も低い値が少年層の82.2%と、世代間で大きな浸透度の差はないことが確認できる。ただし、非定型表現では、全場面平均で高年層が52.2%と、次点の中年層(19.7%)の倍以上の値となっており、他世代に比較して非定型表現を交わす割合が高い。一方、少年層は

高年層	両親(18)	同親(22)	目下(17)	同疎(17)	やや目上(22)	最上(21)	未知(17)	全場面(134)
●：定型的表現	83.3%	77.3%	88.2%	88.2%	95.5%	95.2%	70.6%	85.8%
◎：準定型表現	0.0%	0.0%	0.0%	5.9%	0.0%	4.8%	0.0%	1.5%
／：非定型表現	38.9%	72.7%	70.6%	41.2%	54.5%	71.4%	5.9%	52.2%
△：呼びかけ	0.0%	4.5%	5.9%	0.0%	4.5%	4.8%	0.0%	3.0%
▲：ドーカー	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.9%	0.7%
φ：身振り	0.0%	4.5%	5.9%	23.5%	31.8%	19.0%	41.2%	17.9%
×：何もしない	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	23.5%	4.5%
中年層	両親(18)	同親(20)	目下(18)	同疎(18)	やや目上(20)	最上(20)	未知(18)	全場面(132)
●：定型的表現	83.3%	90.0%	88.9%	88.9%	90.0%	95.0%	77.8%	87.9%
◎：準定型表現	0.0%	0.0%	5.6%	5.6%	20.0%	10.0%	0.0%	6.1%
／：非定型表現	11.1%	30.0%	33.3%	16.7%	15.0%	30.0%	0.0%	19.7%
△：呼びかけ	0.0%	15.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.3%
▲：ドーカー	0.0%	10.0%	5.6%	16.7%	20.0%	10.0%	0.0%	0.8%
φ：身振り	0.0%	35.0%	33.3%	77.8%	75.0%	70.0%	33.3%	47.0%
×：何もしない	16.7%	0.0%	0.0%	5.6%	0.0%	0.0%	50.0%	9.8%
若年層	両親(21)	同親(21)	目下(21)	同疎(21)	やや目上(21)	最上(21)	未知(21)	全場面(147)
●：定型的表現	85.7%	85.7%	76.2%	81.0%	100.0%	90.5%	61.9%	83.0%
◎：準定型表現	0.0%	4.8%	9.5%	14.3%	19.0%	23.8%	4.8%	10.9%
／：非定型表現	14.3%	14.3%	19.0%	14.3%	9.5%	14.3%	0.0%	12.2%
△：呼びかけ	9.5%	19.0%	9.5%	4.8%	4.8%	0.0%	0.0%	6.8%
▲：ドーカー	0.0%	14.3%	9.5%	9.5%	9.5%	9.5%	4.8%	8.2%
φ：身振り	4.8%	28.6%	42.9%	47.6%	66.7%	71.4%	19.0%	40.1%
×：何もしない	23.8%	0.0%	14.3%	4.8%	0.0%	0.0%	42.9%	12.2%
少年層	両親(19)	同親(20)	目下(18)	同疎(19)	やや目上(20)	最上(20)	未知(19)	全場面(135)
●：定型的表現	95.0%	80.0%	70.0%	70.0%	90.0%	100.0%	50.0%	82.2%
◎：準定型表現	0.0%	5.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.7%
／：非定型表現	0.0%	5.0%	5.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.5%
△：呼びかけ	0.0%	15.0%	5.0%	5.0%	10.0%	0.0%	0.0%	5.2%
▲：ドーカー	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.0%	0.7%
φ：身振り	5.0%	15.0%	15.0%	25.0%	75.0%	80.0%	25.0%	35.6%
×：何もしない	0.0%	0.0%	5.0%	25.0%	0.0%	0.0%	45.0%	11.1%

場面名のあと()内の数値は、無回答を除いた有効回答総数。棒グラフは使用率を各セル内の占有率で示したもの。

図3 待遇的場面別の表現出現割合(全体)

1.5%ときわめて低い。非定型表現については、高年層／中・若年層／少年層という世代差があると言つてよい。その他に、動作（身振り）の面で、40%前後の値を示す少・若・中年層と、20%弱に留まる高年層の間に差があることも見て取れる。このように気仙沼方言において、あいさつ場面における動作（身振り）の世代差が実証されたことは、貴重な調査成果と言える。その他に、待遇的場面別の世代間の差について、主に(9) a～fのような特徴が指摘できる。

(9) a.未知の相手を除き、定型的表現の浸透度の場面差は、中年層が全場面に渡って80～90%の高い値を示すのに対し、高年層は、目上（最上・やや目上）／疎遠な者（同疎・目下）／

近しい者（両親・同親）という浸透順の層がある。一方、若年層は、目上（最上・やや目上）／近しい者（両親・同親）／疎遠な者（同疎・目下）と、高年層とカテゴライズは同じだが、浸透順に異なりが見られる。少年層は、目上（最上・やや目上・両親）／近しい者（同親）／疎遠な者（同疎・目下）と、若年層と両親の位置づけが異なる。

- b. 非定型表現は、どの場面においても世代が下るにつれて出現割合が下がる。また、中・高年層においては、最上と同親・目下で高い値を示すという共通性が見られる。
- c. 呼びかけは、若年層を中心に、親しい相手への場面で用いられる。
- d. 「ドーモ」は、値は高くないが、若・中年層を中心に、場面横断的に用いられる。
- e. 動作（身振り）は、少・若・中年層を中心に、目上（最上・やや目上）の相手への（中年層はそれに加えて同疎にも）出現割合が高い。
- f. 「何もしない」行動様式は、どの世代においても未知の相手への出現割合が高い。両親への場面では、若年層>中年層>高年層の順に出現割合が高い。

5 あいさつ表現の変化に関する考察と本稿のまとめ

以上、前節まで気仙沼市の朝の出会い時のあいさつ表現の全体的傾向と世代別の特徴を見てきた。2024年度の世代別の調査結果からは、(10)のような事実が確認できた。

- (10) a. 全世代の使用実態から定型的表現使用地域とみなせる。
 - b. 待遇的場面別に見ると、親しい相手と目上の相手に非定型表現が一定程度併用されている。
 - c. 動作に関して待遇的場面別の使い分けが見られる。
 - d. 定型的表現の浸透度は世代によって待遇的場面別の浸透順の異なりがある。
 - e. 非定型表現は世代が下るにつれ、定型的表現との併用が減じる。
 - f. 動作（身振り）は高年層以外の世代で目上の相手などに多く用いられている。
- (10) a, b に関して、中西（2012、2019）で課題として残した多人数調査による地域の使用実態検証に取り組み、世代を広げた調査で、より精密に、気仙沼市が定型的表現使用地域であるという特徴を導出できたと言える。さらに、高年層が気仙沼方言の伝統的なあり方を反映しているとみなし、それに対して異なるあり方を示す少年層が新しい使用実態だとみなして変化の方向性を読み取れば、高年層から若年層に向けて、定型化は、定型的表現と非定型表現を併用するあり方から、定型的表現のみを使用するあり方へ変化していると言えよう。ただし、動作なども含む表現様式レベルで全体を見ると、若・中年層では場面横断的に、少年層では最上・やや目上に対して、動作（身振り）が高い割合で定型的表現と併用されていることが注目される。今回の調査では、動作（身振り）が回答されたとき、厳密に定型的表現との併用を確認したわけではないので断定はできないが、若い世代になるにつれて定型的表現に言語形式が集約していくことで、言語形式上の表し分けが困難になる関係表示の機能を、動作（身振り）を伴うことで補っている可能性が考えられ

る。例えば、心理的に距離が遠い相手、目上や疎遠な同年代の相手に対する定型的表現「オハヨーゴザイマス」の単体使用が定着していくと、言語運用上の関係表示で区別がつかなくなるが、そこに目上に対して「お辞儀」などを伴うことで、表し分けられるようになるということである。つまり、今回の気仙沼市の世代別の使用実態からは、動作も含めた定型化の変化の方向性と可能性とが読み取れるということである。

ただし、このような世代間の相違を通して推察した「見かけの時間の変化」の知見を言語変化として確度あるものにするには、一定の期間を経て同一規格同一規模の調査を行う「実時間の変化」を捉える調査で、この変化が当該世代やその下の世代に広まっているかを検証する必要がある。また、2006年時の気仙沼方言調査の、朝の出会いのあいさつに関するアンケート調査との比較も、過去との比較で実時間の変化を捉えるための傍証となる。すべて、今後の課題とする。

注

- 1 筆者が2015年に関東地方で行った若年層（首都圏出身、20～22歳、7名）への記述調査の結果をもとに、使用の多い形式を定型的表現として採用した。代表語形の提示にあたって、敬体、常体の区別は示していない。
- 2 本稿は、JSPS課題番号20K00649, 22H00664の助成を受けたものである。

文 献

- 小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言いかた西東』岩波新書
- 沢木幹栄・杉戸清樹（1999）「世界のあいさつ言葉の対照研究に向けて—あいさつ言葉への視点」
『国文学解釈と教材の研究』44（6）学灯社
- 中西太郎（2008）「あいさつ言葉の定型化をめぐって—「おはよう」を事例とした定型化の検証—」
『国語学研究』47「国語学研究」刊行会
- 中西太郎（2011）「あいさつ表現」小林隆編『宮城県・山形県陸羽東線沿線地域方言の研究』東北
大学大学院文学研究科国語学研究室
- 中西太郎（2012）「あいさつ表現」小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北
大学大学院文学研究科国語学研究室
- 中西太郎（2015）「言語行動の地理的・社会的研究—言語行動学的研究としてのあいさつ表現研究
を例として—」『方言の研究』1 日本方言研究会
- 中西太郎（2019）「あいさつ表現定型化の実態」東北大学方言研究センター編『被災地方言の保存・
継承のための方言の記録と公開2』pp. 65-73. 東北大学大学院文学研究科国語学研究室
- 中西太郎・田附敏尚・内間早俊（2009）「秋田県の言語調査報告」『東北文化研究室紀要』50 東北
大学大学院文学研究科東北文化研究室
- 三井はるみ（2006）「おはようございます、こんばんは」『月刊言語』35（12）大修館書店

子どもに対する就寝の働きかけの言語行動

椎名 渉子

1 調査の目的

2024年度に東北大学国語学研究室が実施した気仙沼市方言調査（以下、本調査）では、子どもに対する就寝の働きかけの言語行動のバリエーションを捉えることを目的としてアンケート調査を実施した。本稿ではその調査報告を行う。

幼児語・育児語および子どもに対する言語行動のなかでも、日常的に行われる就寝にかかる指示・促しを尋ねる際、「やさしく言うとき」・「きびしく言うとき」という場面を設け、談話レベルから見た表現の構造と、表現法レベルから見た就寝の指示表現について整理する。

三井（2006）では『方言文法全国地図』（第209・210・212・213図）を取り上げ、子どもに対する指示表現（「起きろ」）の全国の傾向を捉えている。本稿では言語形式面だけでなく、談話レベルからどういった言語要素が用いられるのかを含めて子どもに対する働きかけの言語行動を捉えることとする。

また、就寝の働きかけにかかる言語行動の一環として、子守歌詞章に出現する就寝を促すおどし表現との関連性を探るため、子どもを怖がらせる要素を入れるとすればどのようなものが入るのかを尋ねる項目も設けた。これについては、東北大学大学院文学研究科国語学研究室が実施した2006年度気仙沼市方言調査と2007年度南三陸地方方言調査^{注1}の報告書（椎名2012）に記載した調査結果との比較も行う。

2 調査の概略

本調査のうち、本稿に取り上げる質問項目は次のとおりである。

[質問1]

子どもさんやお孫さんが夜なかなか寝ようとしないときを想像してください。やさしく言い聞かせて寝かせようとする場合、どのように言って寝かせますか。

[質問2]

子どもさんやお孫さんが夜なかなか寝ようとしないときを想像してください。きびしく言い聞かせて寝かせようとする場合、どのように言って寝かせますか。

[質問3]

「お化けが来るから早く寝ろ」というように、子どもを少し怖がらせるような言い方をしたことがありますか。どれかに○をしてください。

【した・する / 自分はしないが、言われたことがある / 言われたことがない】

[質問4]

前の質問で「した・する」「自分はしないが、言われたことがある」と回答したかたに質問します。実際にどのように言っていた、または言われていましたか。また、「言われたことがない」かたは、もし言うとすればどんなふうに言いますか？

本稿では回答を高年層（60代以上）、中年層（40～60代）、若年層（20～30代）、高校生（10代）の世代別に区分する。なお、回答内容を記載する際には回答者の表記を採用している。

本調査では【質問1】【質問2】の回答について、「言っていたことがある」「言われたことがある」「想像で回答した」の選択肢も設けた。当然ながら育児経験の有無を含め世代によって使用語・理解語の量に差が生じ、高年層ほど「言っていたことがある」（使用語）の選択が増加する。しかし本稿では使用語・理解語にかかわらず「特定場面に用いる表現として回答者の意識に上がったものを観察する」というスタンスをとり、はじめから全てのデータを使用語・理解語に分けることはしない。必要に応じて使用語・理解語の選択を参照する。

3 調査の結果

得られた回答は(1)～(3)の観点から整理し、考察していく。(1)就寝の働きかけを構成する要素と(2)就寝の指示形式のバリエーションは【質問1】【質問2】の回答内容を対象に、(3)子どもを怖がらせるおどしかたのバリエーションは【質問3】【質問4】の回答内容を対象に考察する。

(1) 就寝の働きかけを構成する要素—やさしく言う／きびしく言う場面

まず全体的な出現割合を確認する。やさしく言うとき（以下、【やさしく】場面）と、きびしく言うとき（以下、【きびしく】場面）に回答された内容を構成要素別に分類した（表1）。構成要素は【指示】【就寝以外の指示】【状況】【寝坊の予想】【明日の予定】【おどし】【ほめ】【感動詞】【その他】が抽出できた。たとえば、「いつまで起きてる。明日も学校だから早く寝ろよ」（高年層・男性）という回答内容の場合、「いつまで起きてる」が【状況】、「明日も学校だから」が【明日の予定】、「早く寝ろよ」が【指示】となる。

【やさしく】場面・【きびしく】場面に共通して出現割合が高いのは【指示】（【やさしく】53.7%、【きびしく】58.1%）で、【状況】（【やさしく】20.7%、【きびしく】22.9%）がそれに続く。わずかではあるが【きびしく】場面の出現割合が高くなっている点も共通する。【きびしく】場面において割合が上がるものが【寝坊の予想】である。反対に【きびしく】場面において割合が下がるのが【就寝以外の指示】【明日の予定】【おどし】【ほめ】【感動詞】であった。

表1 構成要素の出現割合

要素	定義・回答例など	【やさしく】	【きびしく】
【指示】	動詞「寝る」の活用 回答例) ねろ／ねらいん など	53.7%(65)	58.1%(61)
【就寝以外の指示】	回答例) お布団に入ろう	2.5%(3)	1.0%(1)
【状況】	望ましくない（寝ない）現在の状況 回答例) いつまで起きてる／早く寝ないと	20.7%(25)	22.9%(24)
【寝坊の予想】	望ましくない（起きられない）翌朝の状況 回答例) 朝起きられないから	1.7%(2)	6.7%(7)
【明日の予定】	話し手側の明日の予定 回答例) かあちゃんしごとにいぐんだよ。	1.7%(2)	1.0%(1)
【おどし】	子どもにとってこわいものを擧げる 回答例) アンモ（おばけ）くるよ	6.6%(8)	4.8%(5)
【ほめ】	回答例) いい子は	1.7%(2)	0.0%(0)
【感動詞】	回答例) ほらほら／なんだべ／もう	10.7%(13)	5.7%(6)
【その他】	回答例) ヒツジ数えながら	0.8%(1)	0.0%(0)
合計		100%(121)	100%(105)

以上の出現傾向を世代別に分類する（表2）。ここでは割合を出さずに実数を示し、どの世代にどの要素が見られたのかという点に着目する。

表2 構成要素の世代別回答数

要素	【やさしく】					【きびしく】				
	高年層	中年層	若年層	高校生	計	高年層	中年層	若年層	高校生	計
【指示】	18	20	16	11	65	17	20	13	11	61
【就寝以外の指示】	0	1	1	1	3	0	1	0	0	1
【状況】	14	3	3	5	25	14	3	4	3	24
【寝坊の予想】	1	1	0	0	2	3	2	2	0	7
【明日の予定】	1	1	0	0	2	1	0	0	0	1
【おどし】	5	1	1	1	8	1	1	2	1	5
【ほめ】	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0
【感動詞】	5	1	4	3	13	3	2	1	0	6
【その他】	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0
合計	44	29	27	21	121	39	29	22	15	105

とくに世代差が認められそうなのは【状況】と【おどし】の回答数である。【状況】は「いつまで起きてるんだ」・「何時だと思っているんだ」（いずれも共通語訳）に類する、発話時にまだ起きている（寝ていない）状態に言及する内容であるが、高年層において【やさしく】【きびしく】とともに14回答見られた。一方、それ以外の世代では3～5回答と少ない結果となった。

【状況】が出現する際、【状況】+【指示】（あるいは【指示】+【状況】）の組み合わせで用いられることがある。この組み合わせを世代別に比較した（表3）。ほかの要素が含まれる回答も含め、

【指示】+【状況】の組み合わせが回答された割合をみると、高年層において【やさしく】・【きびしく】ともに25%と高い結果となった。このことから、場面に関係なく「いつまで起きているんだ、早く寝ろ」といった表現が高年層に一定の定型性をもって回答されたといえそうである。

表3 【指示】+【状況】が組み合わせで出現する割合

世代（場面別母数）	【やさしく】	【きびしく】
高年層（【や】44, 【き】39）	25%(11)	25.6%(10)
中年層（【や】29, 【き】29）	6.9%(2)	10.3%(3)
若年層（【や】27, 【き】22）	11.1%(3)	13.6%(3)
高校生（【や】21, 【き】15）	14.3%(3)	13.3%(2)

また、高年層話者の【やさしく】場面における【おどし】が5回答あり、ほかの世代よりも多いことが特徴的であった。また、【おどし】5回答のうち、1回答はそれを実際に「言っていたことがある」、3回答は「言っていたことがある」と「言われたことがある」の両方に○が付されていた。しかし、【きびしく】場面においてはどの世代にも【おどし】が1~2回答見られ、世代差は見られない。さらに、高年層においては【感動詞】の使用もほかの世代より多いが、各世代の合計数から見ると世代差はそこまで目立たない。

(2) 就寝の指示のバリエーション—やさしく言う／きびしく言う場面

【指示】は就寝の働きかけの中心的要素といえる。ここでは、【指示】に含まれる形式をみていく。動詞「寝る」の活用ほか、就寝をどのように促すのかに着目し、出現形式を整理する。【やさしく】場面の65回答、【きびしく】場面の61回答を対象とし、まずは世代に分けずに全体の出現割合を場面別に示す（表4）。

全体として「寝ろ」が【きびしく】場面において34%を占め、【やさしく】場面より高い割合を占めることがわかる。反対に、「寝るよ／寝るんだよ」「寝るべ／寝っぺ」「寝るべし／寝っぺし」「寝よう」といった類は【やさしく】場面では高い割合を示すが、【きびしく】場面での割合は低い。

また、待遇表現類のなかでも方言形「寝らい（ん）」は【やさしく】場面で30%を超え、高い割合を占めている。一方、同じ待遇表現類でも共通語形「寝なさい」をみると【きびしく】場面の出現割合のほうが高い。また、活用形類の「寝るよ／寝るんだよ」と幼児語（ネンネ）の使用は【やさしく】場面のみに見られた。

三井（2006）で整理された『方言文法全国地図』（第5集209・210・212・213図）の子どもに対する「起きろ」の言いかたの全国分布においては、きびしく言う場合（『方言文法全国地図』第5集212・213図）より、やさしく言う場合（『方言文法全国地図』第5集209・210図）のほうに待遇表現形式（「起きなさい」など）が全国的に多く見られると指摘されるが、本調査においては【きびしく】場面に「寝なさい」の割合が高かった。

表4 「寝る」の指示形式の出現割合

分類	回答例	【やさしく】	【きびしく】
活用形類	寝ろ	4.6%(3)	34.4%(21)
	寝ろよ	1.5%(1)	0.0%(0)
	寝ろや	0.0%(0)	1.6%(1)
	寝ろでは	1.5%(1)	3.3%(2)
	寝ろってかだってっぺ	0.0%(0)	1.6%(1)
	寝るよ／寝るんだよ	9.2%(6)	0.0%(0)
	寝るべ／寝っぺ	10.8%(7)	1.6%(1)
	寝るべし／寝っぺし	7.7%(5)	1.6%(1)
	寝よう	7.7%(5)	1.6%(1)
待遇表現類	寝らい (ん)	30.8%(20)	18.0%(11)
	寝らい (ん) よ	4.6%(3)	4.9%(3)
	寝な	3.1%(2)	1.6%(1)
	寝なさい	9.2%(6)	18.0%(11)
	寝ますよ	0.0%(0)	1.6%(1)
依頼類	寝てけらいん	0.0%(0)	1.6%(1)
当為類	寝ねーとだめだぞ	1.5%(1)	8.2%(5)
勧め類	寝たほうがいい	1.5%(1)	0.0%(0)
幼児語（ネンネ）	ネンネしよう	6.2%(4)	0.0%(0)
合計		100%(65)	100%(61)

この点について、回答者の世代を踏まえて見ていく。表4の出現割合を回答者の世代別に表5に整理した（表2と同様に、出現割合ではなく実数で示している）。表5において、待遇表現類「寝なさい」を回答した世代をみると、少数ではあるが高年層より中年層以下の世代であることがわかる。また、【やさしく】場面のみに見られた活用形類「寝るよ／寝るんだよ」の主な回答者は高校生であり、幼児語「ネンネ」の回答者も若年層であった。このように、共通語形および幼児語の使用に世代差が見られた。

一方、同じ待遇表現類の「寝らい (ん)」、活用形類の「寝るべ／寝っぺ」といった方言形は高年層にやや多く回答されていることがわかる。ほかにも、方言形の回答として「寝ろってかだってっぺ(寝ろと言ってるだろう)」、「寝てけらいん」といったものも数は少ないが中・高年層に見られる。このことから、「寝ろ」以外の形式においては、方言形の回答は高年層、共通語形の回答はそれより若い世代といったように、方言形／非方言形の使用に世代差が見られたといえそうである。

表5 「寝る」の指示形式の世代別回答数

分類	場面	【やさしく】					【きびしく】				
		高年層	中年層	若年層	高校生	計	高年層	中年層	若年層	高校生	計
活用形類	寝ろ	1	1	1	0	3	5	7	5	4	21
	寝ろよ	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	寝ろや	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	寝ろでは	0	0	1	0	1	0	1	1	0	2
	寝ろってかだつてっぺ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	寝るよ／寝るんだよ	0	1	1	4	6	0	0	0	0	0
	寝るべ／寝っぺ	3	2	2	0	7	0	1	0	0	1
	寝るべし／寝っぺし	2	2	0	1	5	1	0	0	0	1
	寝よう	0	1	1	3	5	0	0	0	1	1
待遇表現類	寝らい（ん）	5	9	4	2	20	6	2	3	0	11
	寝らい（ん） よ	2	1	0	0	3	3	0	0	0	3
	寝な	0	1	0	1	2	0	1	0	0	1
	寝なさい	1	0	3	2	6	1	3	3	4	11
	寝ますよ	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
依頼類	寝てけらいん	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
状況提示類	寝ねーとだめだぞ	1	0	0	0	1	1	1	1	2	5
勧め類	寝たほうがいい	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0
幼児語（ネンネ）	ネンネしよう	1	0	3	0	4	0	0	0	0	0
	合計	18	18	16	13	65	18	18	13	12	61

(3) 子どもを怖がらせる言いかたのバリエーション

表2において【やさしく】場面の回答に【おどし】が出現していたことを述べたが、ここでは「寝ないとおばけがくるよ」などといった子どもを怖がらせる言いかたに限定した〔質問3〕〔質問4〕の回答を対象に、使用の有無と表現内容についてみていく。

まず、実際に子どもを怖がらせるような言いかたをしていたかどうかについて尋ねた結果を表6に示す。大きな世代差は見られないが若年層・高校生で「言われたことがない」と回答した人が全体の半数弱であった。反対に、高年層においては表2で示したように【やさしく】場面でも【おどし】が見られたことと関連する傾向が見られた。高年層では子どもを怖がらせる言いかたを「言っていたことがある」「言われたことがある」と回答した人が全体の半数以上を占める結果となった。

表6 子どもを怖がらせる言いかた：使用の有無についての世代別回答数

	高年層	中年層	若年層	高校生
言ったことがある	6	11	1	2
言われたことがある	8	7	10	5
言われたことがない	6	4	8	5
NR・空欄	1	0	1	0
合計	21	22	20	12

また、表現をタイプ別に整理すると5つのタイプがあった（表7）。単純に怖がらせる主体が聞き手のもとへ移動してくることを述べるA 移動タイプ、望ましくない（寝ない）状況の条件をつけて怖がらせる主体が聞き手のもとへ移動することを述べるB 状況+移動タイプ、怖がらせる主体が聞き手のもとへ移動することを理由に就寝を指示するC 移動+指示タイプ、望ましくない（寝ない）状況と怖がらせる主体の移動を理由に就寝を指示するD 状況+移動+指示タイプ、怖いという話し手の主観提示を理由に就寝を指示するE 理由+指示タイプである。世代にかかわらず多くを占めたのがB 状況+移動タイプと、C 移動+指示タイプであった。子守歌詞章においても「ハヤクネナイト モー クツツオ（早く寝ないとお化けが来るぞ）」といったようなB 状況+移動タイプの詞章が東北地方の詞章に見られる。

表7 子どもを怖がらせる言いかた：5つのタイプの世代別回答数

おどしかたのタイプ	全体	高年層	中年層	若年層	高校生
A 移動タイプ 回答例）おばけ来るぞ	11	4	3	3	1
B 状況+移動タイプ 回答例）いつまでも寝ないでいるとおばけがフトンに入ってくるぞ	19	8	4	1	6
C 移動+指示タイプ 回答例）おっかねーのくっから はやくねらいん	20	6	8	5	1
D 状況+移動+指示タイプ 回答例）遅ぐまで起きでっと、化げもの出てくっから、早く寝ろや！	4	2	2	0	0
E 理由+指示タイプ 回答例）おっかねがら はやく寝ろ	1	1	0	0	0
合計	55	21	17	9	8

表8 怖がらせる主体：世代別回答数

	全体	高年層	中年層	若年層	高校生
おばけ・ばけもの	20	5	9	4	2
アンモ	12	8	2	1	1
鬼	11	3	2	2	4
もう	5	2	1	1	1
もーさん	1	1	0	0	0
コウモリカッカ	1	1	0	0	0
ひとさらい	1	1	0	0	0
人買い	1	0	0	1	0
おっかねーの	1	0	1	0	0
虎	1	0	1	0	0
孫太郎虫	1	0	1	0	0
合計	55	21	17	9	8

また、怖がらせる主体が何かについて世代別に整理し、表8に示す^{注2}。全体的に見ると、「おばけ・ばけもの」、化け物を意味する「アンモ」、「鬼」が多い結果となった。椎名（2005）に指摘した子守歌詞章における子どもを怖がらせる主体として、気仙沼市を含む東北地方では化け物類が他地域に比べ多かった。この点で子守歌詞章と類似の傾向が見られる。

世代別に見ると、高年層は「アンモ」、

中・若年層は「おばけ・ばけもの」、高校生は「鬼」を多く回答していることがわかる。怖がらせる主体にも世代差が認められた。椎名（2012）においても、若年層は「鬼」のみ、中・高年層からは「アンモ」系が回答されていたのと同様の結果となった。しかし、椎名（2012）では、「アンモ」系のバリエーションとして「アンモッコ」「アモジャー」「アモー」「モーコ」「モッコ」「モンコ」といった語形も見られたが、本調査においては「アンモ」「モー」「もーさん」のみが回答された。2006・2007年の調査から18年経過し、化け物類の方言バリエーションが減少した可能性が示唆された^{注3}。

4 まとめ

最後に全体の結果を簡潔に整理しておく。

- (1)就寝の働きかけのストラテジーからみると高年層の特徴として、【状況】・【おどし】が多いことがあげられる。また、【やさしく】【きびしく】場面にかかわらず【状況】+【指示】の組み合わせで用いるのも特徴的であった。
- (2)就寝の指示のバリエーションでは方言形／非方言形の使用の有無に世代差が見られた。
- (3)子どもを怖がらせる言いかたは、東北地方の子守歌詞章と類似の傾向が見られた。子どもを怖がらせる主体として高い割合を占める化け物類の一つ「アンモ」系のバリエーションは減少している。

注

- 1 2006年度気仙沼市方言調査（面接調査）、2007年度南三陸地方方言調査（面接調査）の両調査結果をまとめた椎名（2012）では、「おどし表現」237表現と、「甘やかし表現」136表現を対象として報告した。
- 2 ここでは「おばけ／お化け」といった回答表記のバリエーションは問題としない。
- 3 ただ、2006・2007年調査は面接（対面）調査であった。調査環境の違いがどの程度回答に影響したかどうかについては不明である。

文 献

- 椎名涉子（2005）「子守歌における「おどし表現」と「甘やかし表現」」『言語』34-5,pp82-89,大修館書店
- 椎名涉子（2012）「寝かせつけ場面を中心とした育児の言語行動」小林隆編『宮城県・岩手県三陸地方南部地域方言の研究』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
- 椎名涉子（2022）「子どもをほめる言い方の地理的傾向」小林隆編『全国調査による感動詞の方言学』,pp117-144,ひつじ書房
- 三井はるみ(2006)「特集・地図に見る方言文法一起きろ[やさしく・きびしく]」『言語』35-12,pp60-63,大修館書店

方言イメージ

佐藤 未依奈

1 はじめに

本稿は、2024年に実施された宮城県気仙沼市方言調査にかかるアンケート調査のうち、方言イメージとそれに関わる項目について、調査結果を報告するものである。今回の調査の目的は、気仙沼方言話者がもつ方言イメージと、それに関わる項目の結果を記述し、先行研究との比較をすることである。なお、本稿における「方言イメージに関する項目」には、方言への好悪意識や、地域への好悪意識、方言ドラマの視聴経験などの多様なものが含まれる。

2 調査の概略

アンケート調査票は、調査員6名^{注1}が調査企画を持ちよることによって作成した。調査員1人につき2ページずつ担当し、分量は表紙・裏表紙を除いて12ページとなった。調査員1人分の範囲を5分以内に回答できるように留意して、調査項目を設問した。筆者もこの要領に従って、選択式4問、自由記述式4問の計8問の調査項目を設定した。質問内容は、「地域や方言への好悪意識」「方言イメージ」「方言ドラマの視聴経験」「ドラマの方言への意識」の大きく4つである。本稿では紙幅の都合上、「ドラマの方言への意識」以外の3つの結果について取り上げる。

インフォーマントは、気仙沼市当地に生まれ育ち、なるべく他市町村に出たことがなく、方言をよく残していると思われる気仙沼市在住の10代から90代の話者83名である。

調査票は、2024年8月7日から8月10日に行った対面での方言調査の終了後に配付し、当研究室^{注2}宛てに返送してもらうよう依頼することで回収した。

3 調査の結果

先述の83名のうち、71名の回答が得られた（回答率は85.5%^{注3}）。男女別、年齢層別の内訳は、表1に示す通りである。

表1 男女別・年齢層別の回答者数

	高年層	中年層	若年層	少年層	計(人)
男性	11	6	6	5	28
女性	10	13	13	7	43
計(人)	21	19	19	12	71

(1) 地域や方言への好悪意識

気仙沼当地や気仙沼方言への好悪意識をたずねる項目について、質問文は「あなたは、気仙沼／気仙沼の方言が好きですか？あてはまる数字1つに○をつけてください」とし、「好き」「どちらかというと好き」「どちらでもない」「どちらかというと嫌い」「嫌い」の5段階の選択肢を設けた。

気仙沼当地への好悪意識の結果を図1、気仙沼方言への好悪意識の結果を図2に示す。

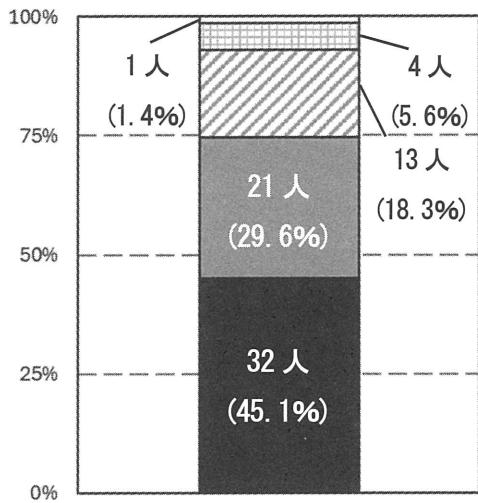


図1 地域への好悪意識(有効回答数 71)

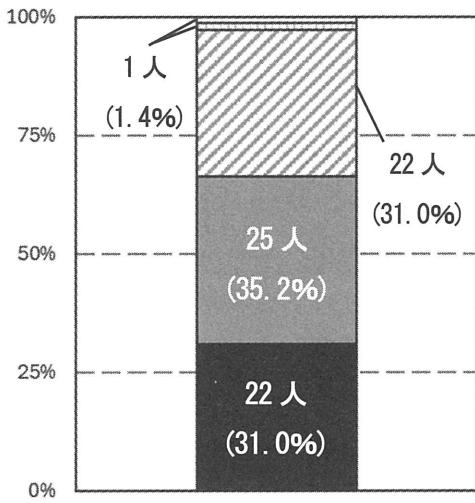


図2 方言への好悪意識(有効回答数 71)

■好き ■どちらかといふと好き ■どちらでもない ■どちらかといふと嫌い □嫌い

地域への好悪意識は「好き」「どちらかといふと好き」の「好き」寄り回答が約 75%を占めており、方言への好悪意識は「好き」「どちらかといふと好き」「どちらでもない」の回答が約 3 割ずつ、ほぼ 100%を占めているといった様相であった。また、「嫌い」「どちらかといふと嫌い」の「嫌い」寄りの回答は、地域への好悪意識では約 7%、方言への好悪意識では約 3% であった。

以上から、気仙沼当地や気仙沼方言への好悪意識は、(i) (ii) のようにまとめられそうである。

(i) 地域への好悪意識は、方言への好悪意識に比べて「好き」寄りの回答が多数を占める一方、「嫌い」寄りの意識も相対的に多い。

(ii) 方言への好悪意識は、地域への好悪意識に比べて「好き」寄りではあるが中立的ともいいうことができ、「嫌い」寄りの意識はあまり抱かれていない。

(2) 方言イメージ

この設問では、井上史雄(1980a)における 16 評価語を用いて、気仙沼方言話者が自己方言(気仙沼方言)に抱くイメージの記述を試みた。

井上史雄(1977, 1980a, 1980b)は、言語心理学における SD 法にならい、諸方言と結びつく形容詞など(評価語)を調べている。先述の 16 評価語は、多変量解析を重ねて 200 評価語から精選されたものであり、方言イメージに関する先行研究(沖裕子 1986)でも参考にされていることから、今回の調査にも適すると考え、用いることとした。

16 評価語の具体的な内訳は、表 2 の通りである。16 評価語は「クラスター分析」と「林の数量化理論第 III 類(以下、林 III 類)」という多変量解析によって処理すると、知的プラス・知的マイナス・情的プラス・情的マイナスという 4 つのグループに分けられる。ここでいう知的・情的とは、それぞれ「知的評価」「情的評価」のことである。表 2 は林 III 類の処理の結果、第 1 軸の値の小さかったものから大きかったものの順に並べてある。

表2 16評価語の内訳

グループ	評価語
知的プラス	都会的・近代的・標準語に近い・歯切れがよい・正しい
情的マイナス	きびしい・豪快・乱暴
情的プラス	大らか・素朴・やわらかい
知的マイナス	昔の言葉を使う・地味・重い・なまりがある・不明瞭

今回の質問文は、「気仙沼の方言について、あなたはどのように感じますか？①～⑯の各項目について、自分の感じに一番近い数字に1つずつ、○をつけてください」とした。評価語は井上史雄(1980b)を踏襲し、林III類の第1軸の値の小さかったものから大きかったものの順に並べ、選択肢は井上史雄(1980b)や沖裕子(1986)にならって「よくあてはまる」「少しあてはまる」「あてはまらない」の3段階とした。実際の調査票の一部を図3に示す。

	よくあてはまる	少しあてはまる	あてはまらない
① 都会的	1	2	3
② 近代的	1	2	3
③ 標準語に近い	1	2	3
④ 歯切れがよい	1	2	3

図3 今回の調査における方言イメージの設問(一部)

続いて、結果を示す。16評価語のうち1つでも○がなかったり、複数の選択肢に○があつたりした回答を除外すると、有効回答数は58であった。「よくあてはまる」を2点、「少しあてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点と計上し、評価語ごとの平均点^{注4}を求めた。図4にその結果を、井上史雄(1980b)と沖裕子(1986)の結果とともに折れ線グラフで示す^{注5}。なお、今回は「気仙沼方言のイメージ」を対象に調査しているが、井上史雄(1980b)と沖裕子(1986)では「東北方言のイメージ」を対象に調査していることを補足する。

図4から、今回の調査では「なまりがある」「昔の言葉を使う」「素朴」の平均点が高く、「都会的」「近代的」「標準語に近い」の平均点が低いことが読み取れる。そして、これらの傾向は、井上史雄(1980b)や沖裕子(1986)にも共通している。また、俯瞰してみると、今回の調査のグラフは井上史雄(1980b)のグラフと重なるところが多い。沖裕子(1986)も、井上史雄(1980b)ほどではないが、部分的に重なっている。これらのことから、気仙沼方言のイメージは、先行研究で示された東北方言のイメージと一致するように思われる。

しかし、今回の調査でのみ平均点が高くなっている、または低くなっている評価語も少数ながら見受けられる。たとえば、「地味」「重い」の今回の調査での平均点は、井上史雄(1980b)や沖裕子(1986)に比べて0.5点以上低くなっている。また、同じく知的マイナスの「不明瞭」は、三調査中もつとも低い平均点を示している。一方、知的プラスの「歯切れがよい」は三調査中もつとも高い平均点を示している。これらの先行研究との差異は、気仙沼方言のイメージを記述する際に重要である。

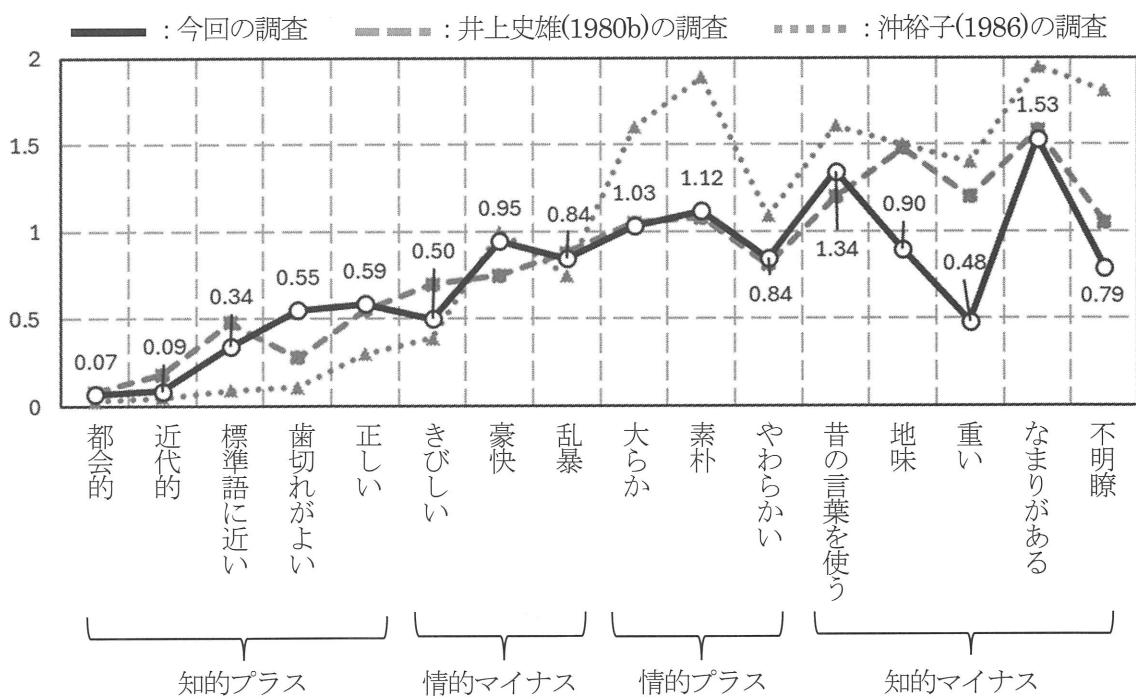


図4 気仙沼方言話者の自己方言に対するイメージ(平均点, 有効回答数 58)

以上から、気仙沼方言のイメージは (iii) のようにまとめられそうである。

(iii) 気仙沼方言のイメージは、全体としては、井上史雄(1980b)や沖裕子(1986)で示された東北方言のイメージと類似している。しかし、井上史雄(1980b)や沖裕子(1986)の東北方言に比べて「地味」や「重い」、「不明瞭」ということはなく、「歯切れがよい」というイメージを抱かれている。

井上史雄(1980b)や沖裕子(1986)の東北方言の結果と、今回の調査の気仙沼方言の結果に以上のようないいが生じた理由には、「回答者の属性」「評価の対象となったのが何方言か」ということが関係すると考えられる。今回の調査は10代から90代の気仙沼方言話者に自己方言（気仙沼方言）の評価をたずねるものであったが、井上史雄(1980b)は、全国7大学（駒沢大学、神奈川大学、相模女子大学、富山大学、京都大学、大阪大学、九州大学）の学生に自己方言（東北方言）の評価をたずねるものであり、沖裕子(1986)では大阪府にある金蘭短期大学の学生に他者方言（東北方言）の評価をたずねるものであった。今回の調査で、井上史雄(1980b)や沖裕子(1986)と明瞭に異なるのは、10代から90代と幅広い年齢層の話者を対象としていることと、評価の対象となっているのが気仙沼方言であることである。年齢層が多様であったり、評価の対象が「東北方言」などの、ある一定の広さをもつものではなく、今回の調査の回答者にとってゆかりのある「気仙沼方言」とピンポイントなものであったりすることにより、「地味」や「重い」、「不明瞭」ということはなく、「歯切れがよい」というややポジティブといえる結果が得られたのではないかと考察する。

(3) 方言ドラマの視聴経験

この項目では、「あなたは、気仙沼の方言が使われているドラマを見たことがありますか?」という質問文で気仙沼方言が使用されているドラマの視聴経験をたずねた。選択肢は「ある」「ない」の2つで、「ある」と回答したインフォーマントには、そのドラマのタイトルの回答を自由記述式で求めた。

まず、視聴経験をたずねる項目には、表3のような結果が得られた。「高年層【20】」など【】内に記した数字は回答者数(実数)、それ以外の「40.0(15.0)」など無標か()内に記した数字は回答者の割合(%)を示している。また、無標の数字は「視聴経験がある」という回答の割合を、()内の数字は「視聴経験がない」という回答の割合を示している。表3から、性別や年齢層によって、視聴経験の有無に差があることが読み取れる。性別に注目すると、男性の視聴経験は23.5%であるのに対し、女性は45.6%と、男性に比べて女性の方が2倍ほど、視聴経験があるという回答が多いことが分かる。年齢層別にみると、高年層の視聴経験は75.0%、中年層は89.5%、若年層は66.7%、少年層は27.3%であり、少く若く高く中の順に視聴経験があるという回答が多い。これらの結果から、(iv)のようなことが指摘できる。

表3 方言ドラマの視聴経験の有無(有効回答数68)

	高年層【20】	中年層【19】	若年層【18】	少年層【11】	計(男女別)【68】
男性【26】	40.0(15.0)	26.3(5.3)	16.7(11.1)	0(36.4)	23.5(14.7)
女性【42】	35.0(10.0)	63.2(5.3)	50.0(22.2)	27.3(36.4)	45.6(16.2)
計(年齢層別)【68】	75.0(25.0)	89.5(10.5)	66.7(33.3)	27.3(72.7)	69.1(30.9)

(iv)方言ドラマの視聴経験の有無とその割合から「方言ドラマへの関心は男性より女性が高い」という性差や、「方言ドラマへの関心は、少く若く高く中の順に高く、もっとも関心が高い中年層の視聴経験は9割にせまるのに対し、もっとも関心が低い少年層の視聴経験は3割に満たない」という年代差が認められそうである。

次に、視聴経験のあるドラマのタイトルをたずねる項目には、表4のような結果が得られた。

表4 視聴経験のある方言ドラマ(有効回答数47、複数回答可)

タイトル	件数
『おかえりモネ』	47
『99.9—刑事専門弁護士 新たな出会い篇』	3
『続・思えば遠くまでできたもんだ』	2
その他	3

表4では「方言ドラマの視聴経験がある」と回答した47名全員が、NHK連続テレビ小説『おかえりモネ』(2021年5月17日～10月29日放送)を視聴していたことに注目される。この結果は、田中ゆかり(2016)などで述べられてきた「NHK連続テレビ小説シリーズの作品は、日本社会から

の関心が高い」ということの証左となりそうである。また、2、3件と少数ながら、TBS『99.9—刑事専門弁護士 完全新作SP 新たな出会い篇』(2021年12月29日放送)、TBS『続・思えば遠くへ来たもんだ』(1981年10月6日～11月10日放送)を視聴していたという回答もあった。後者は1980年代の作品であるが、この作品の視聴経験があるインフォーマントは『おかえりモネ』の視聴経験もあると回答していたことから、気仙沼方言話者のなかには、長期間、方言ドラマへの関心を持ち続ける話者もいるということが推測できる。その他は「題名を忘れた」「再現ドラマのようなもの」という回答や、映画『自虐の詩』(2007年10月27日放映)という回答である。以上から、特筆すべきことは(v)の通りである。

(v) 気仙沼でもっとも注目された方言ドラマはNHK連続テレビ小説『おかえりモネ』であり、方言ドラマの視聴経験がある話者の全員が視聴していた。

4 おわりに

以上、本稿では気仙沼方言の方言イメージに関わる項目について、(i)から(v)のようなことが確かめられた。

- (i) 地域への好悪意識は、方言への好悪意識に比べて「好き」寄りの回答が多数を占める一方、「嫌い」寄りの意識も相対的に多い。
- (ii) 方言への好悪意識は、地域への好悪意識に比べて「好き」寄りではあるが中立的ともいうことができ、「嫌い」寄りの意識はあまり抱かれていない。
- (iii) 気仙沼方言のイメージは、全体としては、井上史雄(1980b)や沖裕子(1986)で示された東北方言のイメージと類似している。しかし、井上史雄(1980b)や沖裕子(1986)の東北方言に比べて「地味」や「重い」、「不明瞭」ということはなく、「歯切れがよい」というイメージを抱かれている。
- (iv) 方言ドラマの視聴経験の有無とその割合から「方言ドラマへの関心は男性より女性が高い」という性差や、「方言ドラマへの関心は、少く若く高く中の順に高く、もっとも関心が高い中年層の視聴経験は9割にせまるのに対し、もっとも関心が低い少年層の視聴経験は3割に満たない」という年代差が認められそうである。
- (v) 気仙沼でもっとも注目された方言ドラマはNHK連続テレビ小説『おかえりモネ』であり、方言ドラマの視聴経験がある話者の全員が視聴していた。

今回の調査では、方言イメージに関連する項目として、地域への好悪意識や方言への好悪意識、方言ドラマの視聴経験などの設問を用意したが、井上史雄(1980b)や沖裕子(1986)との比較ができたり、田中ゆかり(2016)で述べられてきたことの証左となったりする結果が得られた点で、有意義な調査を行うことができたと考える。

今後は、今回調査した「地域や方言への好悪意識」「方言イメージ」「方言ドラマの視聴経験」の結果を互いにかけあわせることで、地域や方言の好悪意識が方言イメージに与える影響や、地域や方言の好悪意識、または方言イメージと方言ドラマの視聴経験との相関関係などについて明らかにしていきたい。

注

- 1 東北大学大学院文学研究科国語学研究室のOBの研究者3名と、同研究室に在籍する博士後期課程学生3名の計6名である。
- 2 東北大学大学院文学研究科国語学研究室のこと。
- 3 小数点第2位を四捨五入している。以降も、割合は小数点第2位を四捨五入して示している。
- 4 小数点第3位を四捨五入している。
- 5 井上史雄(1980b)と沖裕子(1986)の平均点の数値は記されていなかったため、本稿における図4は、筆者が井上史雄(1980b)における図2と沖裕子(1986)における図3から、平均点を目視により読み取り、作成したグラフである。そのため、本稿の図4における井上史雄(1980b)と沖裕子(1986)の結果は、あくまで再現のレベルに留まることに注意されたい。

文 献

- 井上史雄(1977)「方言イメージの多変量解析（上・下）」『言語生活』311,312
井上史雄(1980a)「方言イメージの評価語」『東京外国語大学論集』30
井上史雄(1980b)「方言のイメージ」『言語生活』341
沖裕子(1986)「方言イメージの形成」『国文学』63
田中ゆかり(2016)『方言萌え!!—ヴァーチャル方言を読み解く』岩波ジュニア新書

外国人に対する方言意識

櫛引 祐希子

1 調査の目的

出入国在留管理庁「在留外国人統計」によると、令和4年末の段階で在留外国人数は307万5,213人であった。新型コロナウイルス感染症の拡大防止による入国制限があった令和3年末までの在留外国人数は276万635人であり、単純に計算すれば、わずか一年で日本国内の外国人が30万人近く増加したことになる。国内の深刻な少子化による労働力不足を背景に2024年6月に可決・成立した改正出入国管理法による育成就労制度の開始によって、在留外国人数は今後益々増加していくと予想される。それは、気仙沼市のような地方の比較的小規模な市町村においても例外ではない。

宮城県仙沼市は、県内で在留外国人が4番目に多く、2022年6月末時点では689人^{注1}である。気仙沼市の総人口が同年12月末時点で58,926人であるため、約100人の内1~2人が外国人ということになる。また、遠洋漁業の街として以前から外国人の滞在者が珍しくなく、最近はインドネシアからの技能実習生^{注2}だけでなく永住者や日本人の配偶者として気仙沼市で暮らす外国人が増加しており、その多くが漁業や水産加工業に従事している。他の地方と同様、気仙沼市においても言語的・文化的な背景が異なる外国人との共生は喫緊の課題となっている。

国際協力機構・アイ・シー・ネット株式会社（2021）によると、気仙沼市は「気仙沼市小さな国際大使館」を設置し、複数の団体が運営に携わる日本語教室に代表される生活の支援のみならず、芋煮会や料理教室などの交流事業、さらに宮城県国際化協会（MIA）の協力で実施する防災講座など、外国人を手厚く支援し市民として共に暮らしていくための施策を展開している。また、モスクやハラール認証の商店・食堂があるように外国人が暮らしやすい環境が整備されている。

しかし、共生のために必要となるのは、外国人に対する社会的な保障や生活空間の整備だけではない。日本人と外国人が互いの違いを受け入れ、相互に歩み寄ろうとする個々の態度が不可欠である。その時、日本人による方言の使用は試金石の一つとなる。なぜなら方言は、共通語の教育を主流とする日本語教育を学んだ外国人にとって理解しづらい言葉だからである。共通語を主に学んだ外国人の日本語能力を汲めば、方言は極力使用しない方が無難である。

だが一方で、小林（2007）にあるように、現代の方言は仲間意識を表明する言葉でもある。それゆえ、外国人を同じ地域の仲間として受け入れる姿勢を示したいと考えれば、コミュニケーションに多少支障があっても方言の使用を心がける日本人がいても不思議ではない。

では、宮城県でも有数の多文化共生地域である気仙沼市の日本人は、気仙沼市で暮らす外国人と方言の関係についてどのように考えているのだろうか。それを明らかにするために今回アンケート調査を実施した。

2 調査の概略

本調査の目的は、気仙沼市で暮らす外国人に対する日本人の方言意識—外国人に対する方言の使用意識だけでなく、外国人が方言を使用することについての意識も含む—を明らかにすることである。調査対象者は 83 名だが、有効回答は 71 名であった。内訳は表 2 にまとめた。

表 1 質問項目の内容と回答方法

	質問項目の内容	回答方法
①	気仙沼市における方言使用状況に対する意識	選択式
②	気仙沼方言を使用する場合、聞き手との関係性（話し手の家族、地元出身の友人、他地域出身の友人）及びその使用頻度	選択式
③	日常生活において外国人と関わる頻度	選択式
④	日本語能力が比較的高い外国人に対する方言使用の有無	選択式
⑤	日本語能力が比較的高い外国人に対する方言使用の理由	記述式
⑥	日本語能力が十分ではない外国人に対する方言使用の有無	選択式
⑦	日本語能力が十分ではない外国人に対する方言使用の理由	記述式
⑧	気仙沼市在住の外国人が方言を使用することの是非	選択式
⑨	気仙沼市在住の外国人に方言を教えることの必要性	選択式

表 2 回答者の内訳

高年層	60 代以上	21
中年層	40 代・50 代	19
若年層	20 代・10 代	19
少年層	10 代（高校生）	12

3 調査の結果

(1) 気仙沼市の方言使用状況についての意識

はじめに、各世代が気仙沼市の方言使用状況に対してどのような意識を抱いているのかを確認する。図 1 は、質問項目①の結果をまとめたものである。

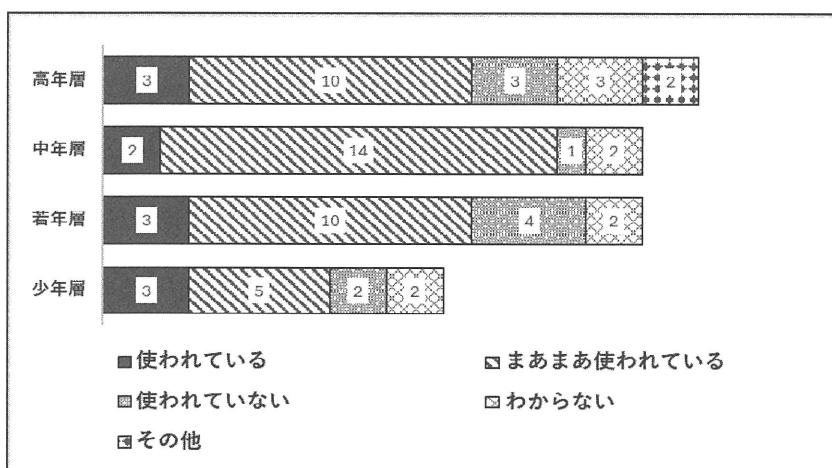


図 1 世代別に見た気仙沼の方言使用状況に対する意識

各世代で「まあまあ使われている」が最も多い。とりわけ中年層が突出しているが、その内の2名は、使用には世代差が大きく若い世代ほど使用しないことを指摘している。各世代に「使われていない」と「わからない」を選択した回答者もいるが、世代を問わず気仙沼市では方言が比較的使われていると認識されていることがわかる。

(2) 話し相手との関係性に応じた方言の使用意識

では、今回の回答者は、どのような相手に方言を使用しているのだろうか。田中（2016）によれば、相手との関係性に応じて方言の使用意識は変わる。今回、田中の調査を参考にして質問項目②を設定した。その結果が、図2、3、4、5である。

図2の高年層と図3の中年層では、全体的に方言を使用する傾向があるが、「方言をよく使う」かどうかの基準は相手の出身地である。だが、中年層の方が高年層よりも「方言をよく使う」の回答者が多い。僅かな差ではあるものの、中年層の方が出身地域を基準に方言を切り替える意識が強いのではないかと考えられる。

図4の若年層は、相手の出身地域ではなく、身内か否かを基準に方言の使用を切り替えている。上の世代の結果と比較すると、気仙沼市の方言が「近しい地元出身者と会話する際の言葉」から「家族と会話する際の言葉」へと変容していることがうかがえる。

しかし、少年層では家族や友人に対しても方言を使用しないという回答が上の世代よりも多く、気仙沼方言が日常的に関わる身近な人と会話する際の言葉ではなくなりつつあることがわかる。

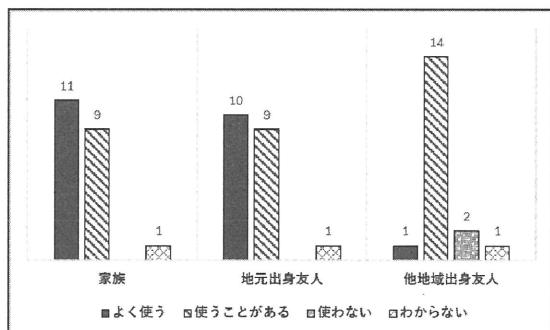


図2 高年層の方言の使用意識

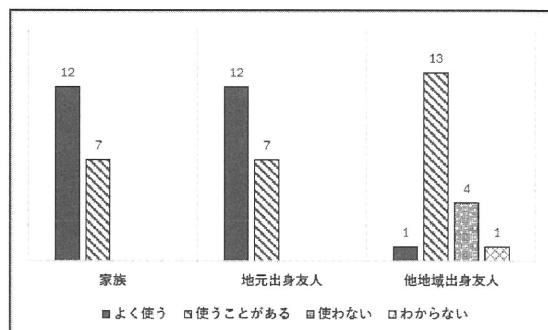


図3 中年層の方言の使用意識

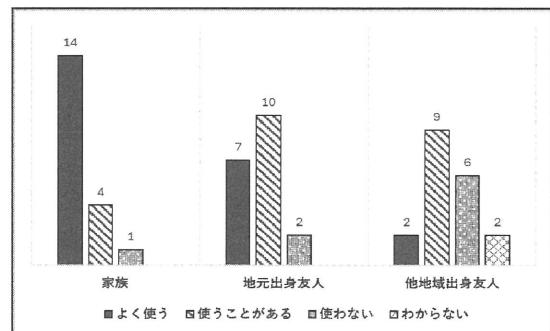


図4 若年層の方言の使用意識

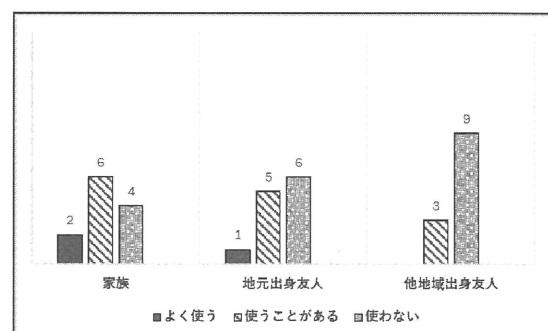


図5 少年層の方言の使用意識

(3) 外国人に対する方言使用意識

では、相手が外国人の場合はどうだろうか。今回の調査では、タイプの異なる外国人 A と外国人 B を話し相手にした場合を想定した。外国人 A には日本での生活に困らない程度の日本語能力がある。一方、外国人 B は日本で暮らし始めたばかりで、まだ日本語に慣れていないという設定である。

はじめに外国人 A に対する方言使用の意識を見る。図 6 は質問項目④の回答結果である。なお、高年層 1 名がこの質問に回答しなかったため合計人数は 20 名となる。

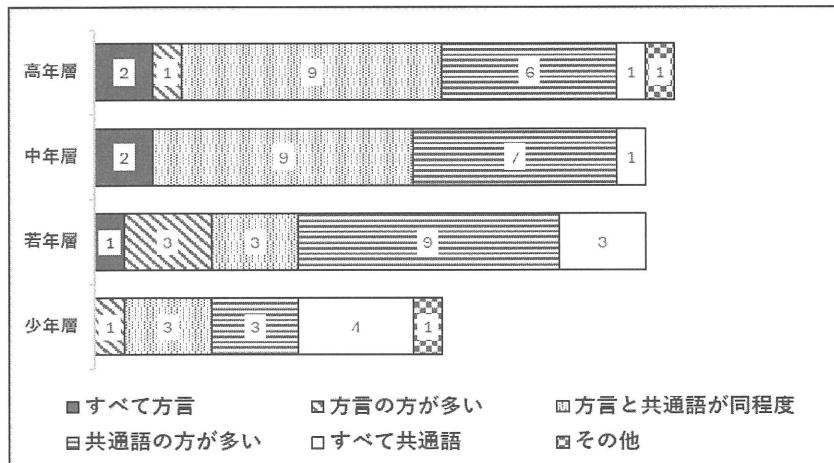


図 6 日本語能力が比較的高い外国人に対して使用する日本語の変種

まず注目されるのは、高年層・中年層では「方言と共に通語が同程度」という回答が約半数あるのに対し、若年層では「共通語の方が多い」が約半数を占めるということである。

「方言と共に通語が同程度」を選択した高年層・中年層では「気仙沼の方言を知ってもらいたい」「気仙沼を理解してほしい」という理由が目を引く。このように地域を理解するツールとして方言を捉える見方は「方言と共に通語が同程度」を選んだ少年層 1 名の理由「気仙沼の方言を知ってほしい。もっとたくさんの人と話した時に方言を理解していくほしい」にも見られるが、他の少年層・若年層では「方言が通じないと困る」「共通語も大切」という理由にあるように、コミュニケーションに支障をきたす恐れのある言葉として方言を捉える傾向がある。

「すべて共通語」を使用するという回答は、世代が若くなるほど増加する。しかし、その理由にも世代差が見られる。少年層 4 名のうち 3 名が「すべて共通語」を使用するのは自分の方言使用能力に自信がないからである。しかし、若年層で方言を通常使用しないと回答したのは 1 名であり、他の 2 名は話し相手の外国人が方言をどの程度理解しているのかが不明であることや外国人が方言の使用を望んでいない可能性を理由として挙げている。

一方、「すべて共通語」を選択した高年層 1 名はコミュニケーションをとるために共通語から使い始め、相手が話せるようなら徐々に方言を入れていくと回答し、同じく中年層 1 名は相手が方言を話したら、それに合わせると回答している。このように高年層・中年層には相手が習得している方言の運用能力に着目して方言の使用を決定しようとする態度が見られる。

では、日本での生活を始めたばかりで日本語能力が十分ではない外国人 B を相手にした場合は、どうだろうか。図 7 は質問項目⑤の回答結果である。なお、この質問項目については表 2 にまとめた全員が回答した。

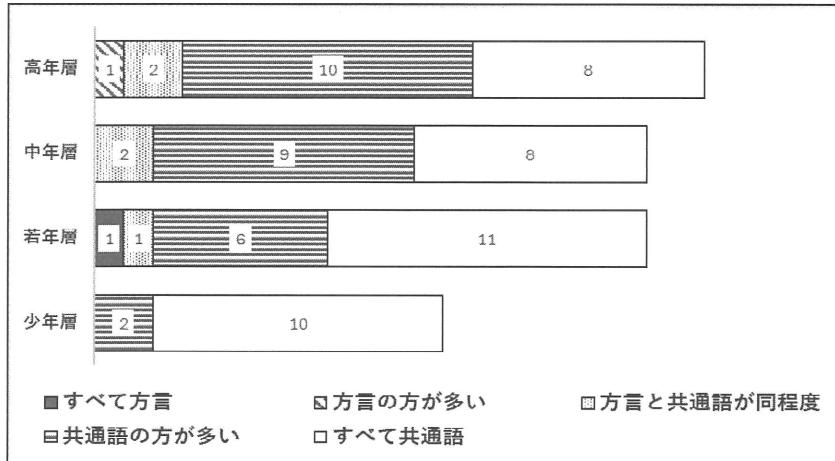


図 7 日本語能力が十分ではない外国人に対して使用する日本語の変種

図 6 と比較すると「すべて共通語」の回答者が各世代で増えている。だが、世代的な違いに目を向けると、ここでも図 6 と同様、若年層を境に上の世代と下の世代で方言使用に対する意識の相違が見られる。

「すべて方言」と回答したのは若年層 1 名のみである。この回答者は、どのような相手であっても使用する言葉を変えないと理由を述べているが、この場合は「英語は使う」と補足している。

「方言の方が多い」を選んだのは高年層 1 名だが、その理由は不明である。

「方言と共に語が同程度」を選択したのは高年層と中年層で 2 名ずつ、若年層が 1 名である。高年層と中年層は「若い人から方言を教えてもらっているかもしれない」「相手が困らないように方言を教えながら話す」(以上、高年層)、「気仙沼弁でしか表せない感覚がある」「気仙沼をより知ってほしい」(以上、中年層) といった理由から、方言を使うことに積極的な姿勢が垣間見える。

実は、こうした姿勢は「共通語の方が多い」を選択した高年層と中年層にも共通する。コミュニケーションを円滑にするためには少しでも外国人が慣れている共通語がふさわしいと考えつつも、「『これは共通語』『これは方言』と分かるように話したい。」(高年層)、「今後のために、方言を知っておくほうがコミュニケーションをとりやすい場面もあるかと思うので、教えながら少しづつ使えばよいかなと思った」(中年層) というように、同じ地域で暮らす以上、外国人も気仙沼市の住民として方言に対する理解を深めることが大切だらうと考える人が比較的多い。

だが、若年層・少年層が挙げた理由に目を向けると、方言の使用がコミュニケーションの支障となることを回避する心理がうかがえる。例えば「方言と共に語が同程度」を選択した若年層 1 名は、方言が通じないとコミュニケーションがとれなくなることを理由に挙げ、外国人に対する方言の使用を否定的に捉えている。

また、若年層・少年層が「共通語の方が多い」を選択した理由にも、「意思疎通の方が大事」「気

仙沼弁で話して伝わらなかったら、Bさんに悪いと思う」(以上、若年層)、「方言が少し入っても共通語の方が良い」(少年層) というように、コミュニケーションが滞りなく行われることを優先しようとする考えが見られる。また、若年層・少年層では 1 名ずつ「(気仙沼以外の) いろいろな所に行くかもしれないから」という理由があった。その内の少年層は「(気仙沼の) 方言も知ってほしいから話す」と回答しているが、若年層・少年層では日本語に不慣れな外国人に対する配慮が方言の使用を控えようとする意識に繋がっていると考えられる。

以上、外国人に対してどのような日本語の変種を使用するか、その意識と理由について概観した。まず、相手の日本語能力に応じて使用する変種を切り替えることは、いずれの世代でも見られたが、その切り替えのパターンは高年層・中年層と若年層・少年層で異なる。

高年層・中年層は、共通語と併用しながらも総じて方言の使用に積極的である。その根底には、方言を介して気仙沼を知ってほしいという意識がある。また、日本語能力が十分ではない外国人に対しても、主に共通語を使いつつ必要に応じて方言で話し、方言を教えようとする。

それに対して若年層・少年層は、共通語の使用を心がけている。中には方言を覚えて欲しいという回答もあったが、基本的に意思疎通が滞りなく行われることを優先し、方言の使用は極力控えようとしている。また、方言によって外国人が困惑することを回避するために共通語を用いるという理由も多い。くわえて、少年層の場合、方言の運用能力に自信がないため共通語を使用するという回答が多いのも特徴的である。

まとめると、いずれの世代も外国人に対して共通語を使うことを基本としつつも、方言の使用に積極的な高年層・中年層と消極的な若年層・少年層という構図が浮かび上がる。そして、その背景には、方言を「地域を理解するためのツール」と捉える高年層・中年層と「意思疎通の支障となる言葉」と捉える若年層・少年層の違いがあると考えられる。さらに、高年層・中年層は外国人に方言の理解を望むのに対し、若年層・少年層は方言に不慣れな外国人への配慮を優先する傾向がある。

ところで、図 6 と図 7 の結果には外国人と関わる頻度は関係しているのだろうか。質問項目③は、この点について確認するために設けたが、今回の回答者のほとんどが [月に数日] [年に数日] [関わることはない] を選択しており、外国人に対する方言使用意識との相関性が判然としない結果となつた。この点については、今回の調査とは異なる角度から別の機会に論じたい。

(4) 外国人の方言使用に対する意識

真田 (1992) では外国人が方言を使用することに対する日本人の複雑な意識が指摘されているが、今回の回答者はどのように考えているのだろうか。これは質問項目⑥で尋ねた。

結果をまとめた図 8 を見ると、世代を問わず外国人の方言使用について好意的な意識が多いが、若年層・少年層では「なんとも思わない」の割合が増加する。この世代が外国人に対する配慮から方言の使用を控える傾向があつたことを踏まえると、「なんとも思わない」は外国人に対する関心の薄さが反映されたというよりも、外国人が使用する言葉に対して第三者が評価を下すものではないという考え方によるものであると考えられる。

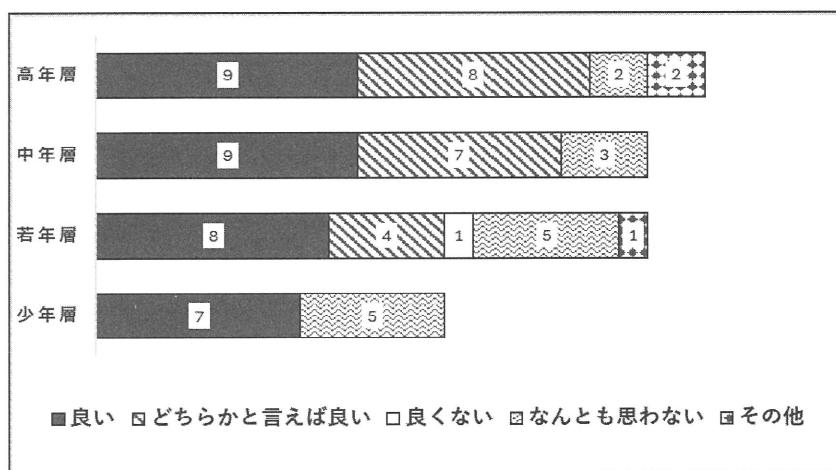


図8 外国人の方言使用に対する意識

(5) 外国人に対する方言教育について

最後に外国人に対する方言教育の必要性について尋ねた質問項目⑦の結果を見る。他の質問項目の結果と比べると、[その他] の自由記述が多い。その内容は「本人が方言を学びたければ教えた方が良い」という学習意欲を尊重するものと、「方言は生活していれば自然に身につくものである」と考える自然習得を重視するものに分かれる。また、若年層 1 名は「(外国人が) 使っていれば好感が持てるが、(方言教育は) 必要とまでは思わない」と回答している。このように方言教育の必要性の是非については、方言や教育に抱く問題意識や関心の程度に応じて回答が分かれたと考えられる。

また、[わからない] を選択する割合が多いのも、この質問の特徴である。とりわけ若年層・少年層の若い世代に [わからない] が多いのは、外国人の方言使用に対して [なんとも思わない] が多かったように（图8）、外国人に対する関心の薄さではなく、[その他] の自由記述にあったような様々な事情が考えられるために回答に窮した結果ではないかと推測される。

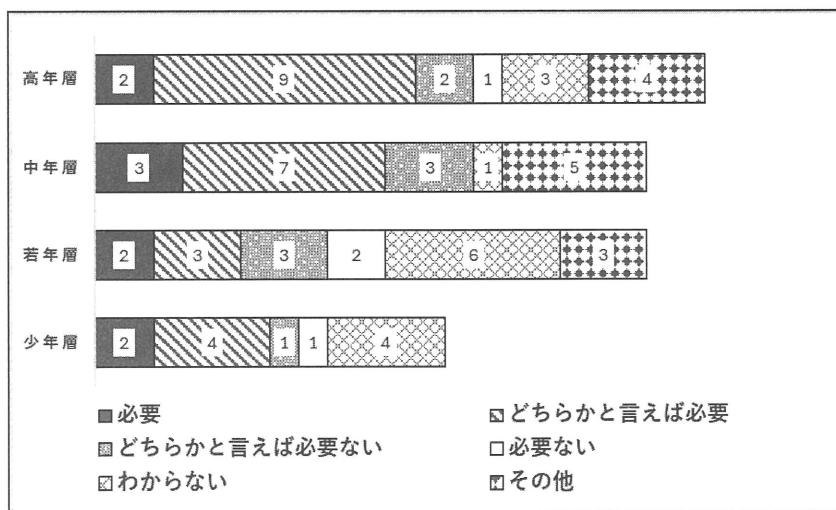


図9 外国人に対する方言教育の必要性

4 まとめ

日本人に対する方言の使用意識では、高年層・中年層が出身地域を基準に方言を使用する程度を切り替えているのに対し、若年層では身内か否かを基準にしていることがわかった。これは田中他(2016)で導き出された《東北タイプ》「方言は家族に対しては使うが、同郷・異郷友人には使わない」と同じだが、今回の少年層の結果を見ると、今後気仙沼市の方言は家族との会話でも使われなくなる恐れがある。

このように若年層・少年層で方言使用の意識が変化する様子は、外国人に対する方言使用意識にも観察できた。高年層・中年層は共通語と併用しつつも方言を積極的に使用するが、若年層・少年層は比較的方言の使用には慎重である。その背景には方言を「地域理解のためのツール」と捉える上の世代と「意思疎通の支障となる言葉」と捉える若い世代の見解の相違があると考えられる。こうした見解の相違は、同じ地域の住民として外国人が方言を理解することを望む態度(高年層・中年層)と外国人が方言で困惑しないように配慮する態度(若年層・少年層)にも表れている。

高村(2023)でも東海地方の日本人大学生の多くが外国人への配慮から方言の使用を控える意識を持っていることが報告されている。現在の若い世代が地域の方言をどのように捉え、外国人とどのような人間関係を構築したいと考えているのかという視点から外国人に対する方言意識を紐解いていくことが、これから多文化共生社会における方言のあり方を検討する上で重要であろう。

注

- 1 現在公開されている平成22年6月時点の宮城県内の在留外国人の状況を参考した。県内で最も多いのが県庁所在地である仙台市(13,943人)、次いで石巻市(1,376人)、大崎市(852人)である。https://www.pref.miyagi.jp/documents/7444/7_sa2.pdf。
- 2 2024年6月に可決・成立した改正出入国管理法により技能実習制度は廃止され、育成労制度が開始されることが決定している。

文 献

- 国際協力機構・アイ・シー・ネット株式会社(2021)「東北における外国人材の現状・課題等に関する調査報告書」
- 小林隆(2007)「方言機能論への誘い」小林隆・真田信治・陣内正敬・井上史雄・日高貢一郎・大野眞男『シリーズ方言学3 方言の機能』岩波書店, pp.v--xiii.
- 真田信治(1992)「方言の情況と日本語教育」『日本語教育』76, 1--8.
- 高村めぐみ(2023)「外国人に方言を使用することに対する意識—東海地方における調査—」『文明(21)』愛知大学国際コミュニケーション学会, pp.115--130.
- 田中ゆかり・林直樹・前田忠彦・相澤正夫(2016)「1万人調査からみた最新の方言・共通語意識—「2015年全国方言意識Web調査」の報告—」『国立国語研究所論集(11)』国立国語研究所, pp.117--145.

医療現場の方言使用

山田 はるか

1 調査の目的

本調査では、医療分野の方言の課題について、気仙沼方言話者を対象に調査を行った。医療・福祉分野の方言に関する課題について、友定（2014）は「意思疎通の可否にかかる課題」と「よりよいコミュニケーションにかかる課題」の大きく2つを挙げている。前者は、診察時等に患者の話す方言が他地域出身の医師・若い世代の医師に伝わらないという課題であり、後者は、患者とのコミュニケーションを円滑にするために医師はどのような言葉を使用するべきであるかという課題である。小林（2007）では、方言には、相手と自分が同一地域社会に帰属する親しい仲間同士であることの確認（相手の確認）、その場の雰囲気を気取らないだけたものにしたいという意思表示（発話態度の表明）の機能があると述べており、方言のこのような機能が、診察場面においても医師と患者のコミュニケーションを円滑化することに役立つと考えられる。実際に、医療場面の方言使用について尋ねた調査には、以下のような研究がある。

医師の立場で回答された調査：吉岡泰夫（2007）が行った2006年4月に行われたインターネットによるアンケート調査。対象者は医師172名、歯科医師3名の合計175名。方言を話す患者に対してどう対応すべきか、医師が方言を使用することでどのような効果があるかを尋ねた。その結果、「患者が話す方言を理解する必要がある」とほとんどの医師が考える一方、医師が話す言葉については方言と共通語が拮抗した。また、患者に方言を使用する効果について、患者に親近感を持たれ、リラックスさせるなどの効果を実感していることが明らかになった。

患者の立場で回答された調査：友定賢治（2014）で取り上げられる県立広島大学の卒業論文で2011年8月に行われたアンケート調査。対象者は広島方言話者の高齢者78名。医師にどの言葉で話しかけてほしいかを尋ねたところ、行きつけの病院であっても、敬体であっても方言をあまり望まない結果となった。

本調査は、気仙沼方言話者が医師の方言使用に対しどのような印象を持つのか、世代別に調査することを目的とし、友定（2014）と同様に患者の立場から意見を尋ねた。

2 調査の概略

本調査は、自記式アンケートを配布し、郵送していただく形で行った。質問は全部で5問であり、1~4問目は吉岡（2007）、5問目は友定（2014）を参考に作成した。

1~4 問目：吉岡（2007）の質問項目・選択肢を、患者を対象とした文章に変更して作成した。

5 問目：友定（2014）の選択肢を気仙沼方言に変更し、医師の出身地を地元出身・他地域出身に分けて尋ねた。また、医師の設定を 50 代に固定した。

実際の質問文・選択肢は以下の通りである。

1. あなたは、診察を受けているときに方言を使うことがありますか。

- a. よく使う b. ときどき使う c. まれに使う d. 全く使わない e. 分からない

2. あなたが診察を受けているとき、医師は方言を使うことがありますか。

問 1 と同様の選択肢

3. 方言を使う患者に対して、医師はどう対応すべきだと思いますか。

- a. 患者が使う方言を理解する必要はないし、常に共通語を使うべきである
- b. 患者が使う方言を理解すべきだし、なるべく同じ方言を使うべきである
- c. 患者が使う方言を理解すべきだが、なるべく共通語を使うべきである
- d. 分からない

4. 診察時に医師が方言を使うことについて、どのようなポジティブな印象を受けますか。（複数回答可）

- a. 親近感を持ち、医師との心理的距離が縮まる
- b. 診察・治療の時にリラックスでき、心を開くことができる
- c. 痛みの感覚や自覚症状などの情報を円滑に話すことができる
- d. 医師と打ち解けて理解し合うことができる
- e. 医師と共に信頼関係を築くことができる
- f. 気さくで患者の気持ちが分かるいい先生という印象を持つ
- g. 医師に好感を持ち、受け入れやすくなる
- h. ポジティブな印象はない
- i. その他 ()

5-1. 診察してくれた医師が、50 代くらいの気仙沼市出身の昔から知っているかかりつけ医師だった場合、次のうち、どの言葉で話しかけてほしいですか。

- a. 丁寧な気仙沼方言 [例：今日はなにしたのすか？/なじょしたのすか？]
- b. 普通の気仙沼方言 [例：今日はなにしたの？/なじょしたっペ？]
- c. 非常に丁寧な共通語 [例：今日はいかがなさいましたか？]
- d. 丁寧な共通語 [例：今日はどうされたんですか？]
- e. 普通の共通語 [例：今日はどうしたの？]

→その選択肢を選んだ理由を書いてください。

5-2. 診察してくれた医師が、50 代くらいの東京都出身の昔から知っているかかりつけ医師だった

場合、次のうち、どの言葉で話しかけてほしいですか。

5-1 と同様の選択肢

調査対象者は気仙沼方言話者であり、高年層（60～80代）21名、中年層（40～50代）19名、若年層（20～30代）18名、少年層（10代）12名の合計70名から回答が得られた。

3 調査の結果

問1から問5の結果について、次節以降の3.1から3.3で述べる。

3.1 診察場面における方言の使用意識

まず、「あなたは、診察を受けているときに方言を使うことがありますか。」という質問に対する回答の結果は図1のようになった（高年層に無効回答1名）。「よく使う」「ときどき使う」「まれに使う」を合わせると、診察時に方言を使用するという回答は、高年層・中年層・若年層は60%を超える一方で、少年層は20%未満と大幅に低い結果となった。

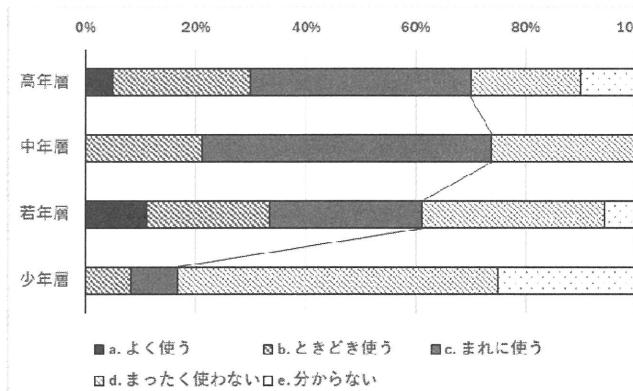


図1 診察を受ける時に方言を使用するか

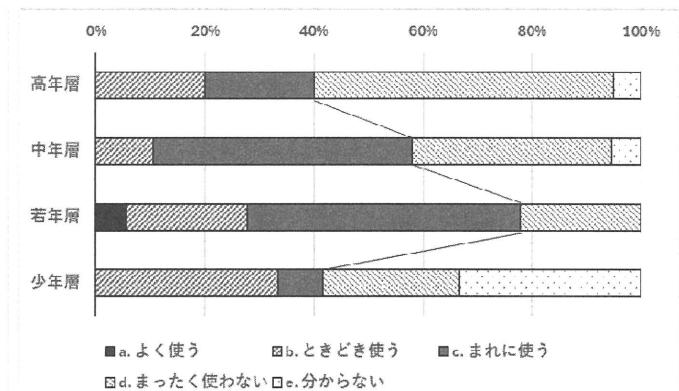


図2 医師は方言を使用するか

続いて、「あなたが診察を受けているとき、医師は方言を使うことがありますか。」という質問に対する回答は、図2のようになった（高年層に無効回答1名）。「よく使う」「ときどき使う」「まれに使う」を合わせると、高年層・少年層は40%であるのに対し、中年層・若年層は60%前後と、高年層・少年層よりもやや高い結果となった。

3.2 医師の方言使用に対する印象

「方言を使う患者に対して、医師はどう対応すべきだと思いますか。」という質問に対する回答の結果は、図3のようになった（高年層、若年層に無効回答1名ずつ）。

図3をみると、「a.患者が使う方言を理解する必要はないし、常に共通語を使うべきである」を回答した人はわずかであり、患者が使う方言を医師は理解するべきであるとほとんどの人が考えていることが分かる。方言の使用の有無については、どの世代も「c.患者が使う方言を理解すべきだが、なるべく共通語を使うべきである」が「b.患者が使う方言を理解すべきだし、なるべく同じ方言を

使うべきである」を上回る結果となつた。世代別にみると、「c.患者が使う方言を理解すべきだが、なるべく共通語を使うべきである」を選択している割合は高年層で80%と最も高く、次いで少年層も8割近くと多くの回答者が選択している。一方、中年層・若年層は約40%とやや低い結果となり、医師が共通語を使うべきであると考える割合には高年層・少年層と中年層・若年層の間に差がみられた。

「診察時に医師が方言を使うことについて、どのようなポジティブな印象を受けますか」と複数

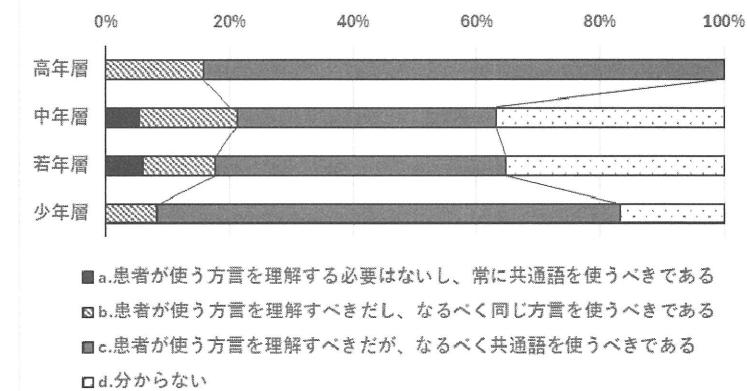


図3 医師にどの言葉で話してほしいか

回答可で尋ねたところ、結果は図4のようになった（高年層に無回答1名）。

「h.ポジティブな印象はない」を選択した回答者はどの世代も少数であり、医師の方言使用に対し何らかのポジティブな印象を持つ回答者が世代に関わらず多いことができる。各世代で共通して多く回答している選択肢は、「a.親近感を持ち、医師との心理的距離が縮まる」であ

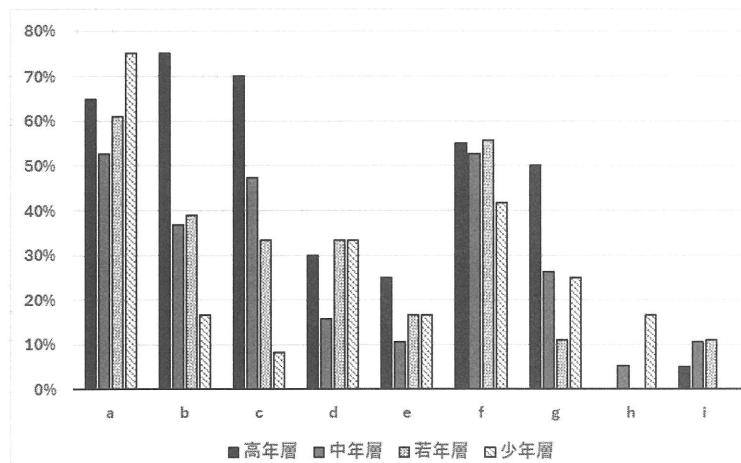


図4 医師の方言使用にどのような印象を持つか

り、次いで多い回答は「f. 気さくで患者の気持ちが分かるいい先生という印象を持つ」だった。反対に、各世代で共通して選択している回答者の割合が低いのは「d.医師と打ち解けて理解し合うことができる」「e.医師と共に信頼関係を築くことができる」だった。世代間に差がみられた選択肢は、「b.診察・治療の時にリラックスでき、心を開くことができる」「c.痛みの感覚や自覚症状などの情報を円滑に話すことができる」の2つであり、高年層が最も高く、中年層>若年層>少年層の順に低くなっている。

3.3 医師の出身による方言使用への印象の違い

気仙沼市出身の医師にどの言葉で話しかけてほしいかという質問に対する回答の結果は、図5のようになつた（高年層、中年層に無効回答1名ずつ）。図5をみると、「丁寧な気仙沼方言」と「普通の気仙沼方言」を合わせると、方言を選択している回答者は、どの世代も40%を超える結果となつた。その中でも、中年層は約70%の回答者が方言を選択している。

一方、東京出身の医師にどの言葉で話しかけてほしいか尋ねたところ、回答は図6のような結果になった（高年層に無効回答1名）。図6をみると、「丁寧な気仙沼方言」と「普通の気仙沼方言」を合わせると、方言で話しかけてほしいとしている回答者は各世代で20%未満となっている。

以上の結果から、医師の出身地が他地域の場合、患者と同じ出身地の場合よりも方言が志向されない傾向がみられた。

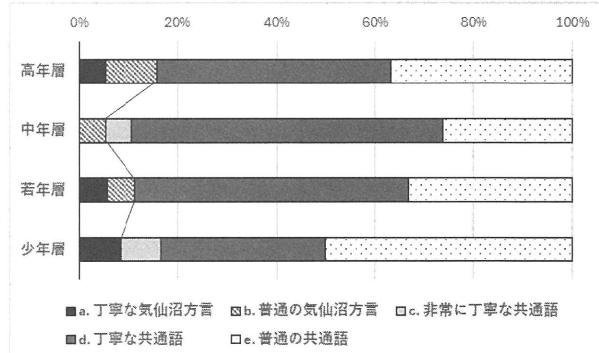
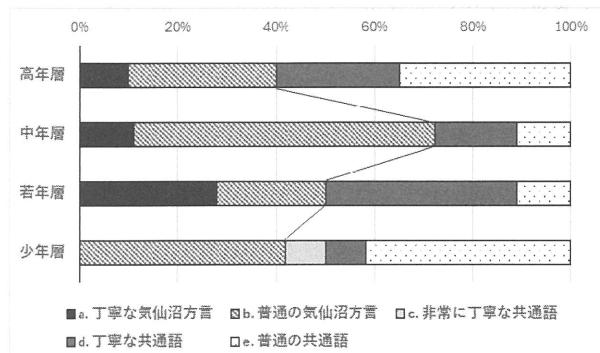


図5 気仙沼市出身の医師に話してほしい言葉

図6 東京出身の医師に話してほしい言葉

続いて、問5-1、5-2の質問で、それぞれの選択肢を選択した理由について自由記述回答をみていく。問5-1の気仙沼出身の医師の場合、類似の回答をグループに分けたところ、以下のような回答がみられた（下線は筆者による）。下線を引いた箇所をみると、それぞれの話者が方言に対して持つ印象や、医師に対して求めている言葉遣いなどが見られた。

①相手に親しみがわく

- a. 丁寧な気仙沼方言：地元出身で昔から知っている方なら気仙沼方言の方が親しみがあつてよい。
(71歳男性)
- b. 普通の気仙沼方言：知人であるならばこのくらいの方が親しみがわく。（39歳男性）

②くだけた雰囲気になる

- b. 普通の気仙沼方言：昔からのかかりつけ医であれば、気安い雰囲気で地元の言葉を使ってもらうことで、落ち着いて、話しやすくなると思う。（47歳女性）/いつもの、気軽な雰囲気で臨むことができるから。（67歳女性）

③医師に好感を持つ

- b. 普通の気仙沼方言：患者の立場からすると、気さくでよい。（76歳男性）/優しい印象がある。
(15歳女性)
- d. 丁寧な共通語：私の年齢のせいかもしません（80代）こちらも丁寧に応えたいです。（81歳女性）/優しく私の具合を聞いてくれそう（77歳男性）

④分かりやすい

- d. 丁寧な共通語：特に方言を話すメリットはなく、お互いの共通語で話せばスムーズだと思うから。（38歳女性）
- e. 普通の共通語：分からない方言で言われたら困るから。（56歳女性）/私は共通語の方が聞き取

りやすいからです。(16歳女性) /コミュニケーションを取りやすい・地元の方言をあまり理解しない (17歳男性)

⑤中立の意見

d.丁寧な共通語：何となく。私の年(30代)では、方言で対応されることはほとんどないです。でも、方言で話しかけてくれても全然大丈夫ですよ。(36歳女性) /最初の会話は共通語で、だんだんと方言で話したい。(60歳女性)

⑥自然・普通

a.丁寧な気仙沼方言：いつもの会話なのでaを選択。(33歳男性) /自然体で接してほしい(最低限の礼儀を持って)(54歳男性) /地元出身の先生であることを知っているので、方言で言われても違和感がしない。(74歳男性)

e.普通の共通語：普通に話したいので(74歳女性)

⑦医師の属性

d.丁寧な共通語：年下の医師だから。(67歳女性) /医師は共通語の方がよい。(30歳男性) /丁寧な共通語の方が話しやすいため。医師と患者は友達ではないため。(24歳女性)

e.普通の共通語：出身気仙沼でも医師は私から見て立場上の方。でもちょっと親しみをこめてもらっての言い方を。(70歳女性) /仕事中なので共通語がよい(他の地域の方には“なまっている”と思われるかもしれません)。(58歳女性)

以上をみると、主に方言に対し、親しみやすい・気安い雰囲気になるという印象を持っており、小林(2007)等の先行研究で指摘されている方言の機能によるものであるということができる。共通語に対しては丁寧である・分かりやすいという印象を持っている。医師が話す言葉について方言・共通語のどちらがよいかということについて、特にこだわりを持たない中立的な意見がみられる一方で、医師という職業に対し共通語で話してほしい、医師と患者という立場を保つために共通語を話してほしいという意見もみられた。

問5-2 東京出身の医師に話しかけてほしい言葉について、選択肢を選んだ理由の自由記述は主に以下のような回答がみられた。問5-1と同様に方言で話されることで親しみがわく等の回答がある一方、他地域出身の医師の場合は、医師に希望する言葉遣いや距離感に問5-1 地元出身の医師との差もみられた。

①相手に親しみがわく

a.丁寧な気仙沼方言：共通語だと他人行儀だから。(33歳男性)

b.普通の気仙沼方言：親しみを感じるから。(90歳男性)

e.普通の共通語：昔から知っている方なので、あまり丁寧な言葉でない方が親しみやすい。(71歳男性) /知っているかかりつけの先生なので、優しくあまり距離が無い感じで話しかけてほしいです。(16歳女性)

②くだけた雰囲気になる

- d. 丁寧な共通語：懐かしくほっとする！（72歳女性）
e. 普通の共通語：昔から知っていたら信頼できている医師の事だと思うのでそこまで丁寧でない方が安心して症状など伝えられそう。（38歳女性） / 安心してお話ができる。（86歳女性）

③医師に好感を持つ

- e. 普通の共通語：気さくでよい。（76歳男性）

④分かりやすい

- e. 普通の共通語：アクセントの違う方言だと通じないから。（56歳女性）

⑤中立の意見

- d. 丁寧な共通語：何となく（17歳女性） / それが普通だと思うので。（39歳女性）

⑥無理に方言でなくても良い

- d. 丁寧な共通語：むりして方言を使ってもらうより、普通に共通語で対応してもらった方がよい。（74歳男性） / 特に方言を使う必要は感じない（76歳男性）

- e. 普通の気仙沼方言：無理に方言を使われると違和感を覚える可能性があるので、話しやすい言葉で良いと思う。長年の付き合いなら普通に話す方が親しみを感じる。方言もある程度理解してもらえていれば伝えやすいとは思う。（47歳女性） / 方言は、無理に使わなくて良いが、理解しようとする姿勢は大事です。（74歳男性）

⑦医師の普段の言葉で話してほしい

- e. 普通の気仙沼方言：その人の自然なままで良いと思う。（54歳男性） / 医師の普段の言葉遣いで、患者側も身構えることなく対応できそうだから。（67歳女性）

⑧医師が地域になじんでいれば方言でもよい

- d. 丁寧な共通語：無理に気仙沼弁でなくても良いので。その方が気仙沼になじんで自然に口をついて出るのであればそれもよい。（48歳女性） / ずっと気仙沼にいて方言が移っちゃうのは仕方ないけどわざわざ方言じゃなくていいかなと思う（16歳女性）

⑨医師の属性

- d. 丁寧な共通語：東京出身だから。（36歳男性）

- e. 普通の共通語：出身がどこであろうと知っているかかりつけの医師でも私から見て立場上の方。でもちょっと親しみを込めての言い方を。（70歳女性）

⑩敬意を払ってほしい

- c. 非常に丁寧な共通語：地方人としてではなく、一人の日本人として扱ってほしいから。（16歳男性）

- d. 丁寧な共通語：Drのいつもの話し方で良いと思うが、やはり一定の患者と医師という距離感は保ってほしい。（40歳女性） / お互い敬意を払い分かりやすく会話をするため（58歳女性）

以上の回答をみると、問5-1と同様に方言を使用してもらうことで親しみを感じる・くだけた雰囲

気になるという意見、共通語の方が分かりやすいという意見がみられた。問5-1には見られなかつた意見として、「無理に方言でなくても良い」「医師の普段の言葉で話してほしい」などの回答が多くみられ、他地域出身の医師に対し共通語を志向する理由には、このような意見が背景にあると考えられる。また、他地域出身の医師であっても方言が自然に口から出るほど地域になじんでいれば方言でもよいと考えている回答者もみられた。

4 まとめ

以上の結果をまとめると、医療現場での方言使用には世代差がみられ、高年層・中年層・若年層と比較して少年層は使用率が低い結果となり、日常生活で少年層が方言をあまり使用しないことが反映されていると考えられる。一方、医師側の方言使用は、中年層・若年層の患者と比較すると高年層・少年層の患者は方言を使用されることが少ない結果となり、患者側の方言使用の傾向と必ずしも一致しなかった。

医師の方言使用に対する印象については、医師は患者の話す方言を理解するべきであるという意見が多数を占めている。この結果は、吉岡（2007）で明らかになった医師側の認識と一致し、医師・患者双方が患者の話す方言の重要性を感じているということができる。一方、医師の話す言葉については共通語を望む意見が方言を望む意見を上回る結果となった。しかし、医師が方言を話すことについてはポジティブな印象を持つ回答者が多く、特に医師に親近感を抱いたり、気さくな印象を抱いたりする話者がどの世代でも多くみられた。世代別に差がみられた回答結果をみると、年齢層が高くなるほど患者が自覚症状を話しやすくなるなどの効果がみられた。

医師の出身に着目すると、他地域出身の医師の場合、地元出身の医師の場合よりも方言を希望しない傾向がみられた。理由として「無理に方言を使用しなくてもよい」「医師にとって自然な言葉で話してほしい」などが挙げられており、医師の話しやすい言葉で自然にコミュニケーションを取りたいという意見が多くみられる。友定（2014）の広島方言話者への調査では方言が志向されない結果となつたが、気仙沼方言話者への調査では医師の出身による差が大きく、地元出身の医師の場合は方言を志向する割合が比較的多い結果となつた。ただし、患者の年齢による違いも明らかになつたため、今後より深く調査をしていく必要があると考えられる。

文 献

- 友定賢治（2014）「「臨床方言学」の確立に向けて」『人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌』14(1),pp.37-49.
- 小林隆（2007）「方言機能論への誘い」 小林隆編『シリーズ方言3 方言の機能』 岩波書店,pp.5-8.
- 吉岡泰夫（2007）「患者とのコミュニケーションに関する調査報告書」『医療における専門家と非専門家のコミュニケーションの適切化のための社会言語学的研究』科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書,pp.29-66.

第2部

名取市における方言による
社会活動の記録と継承
—方言を絶やさないために種を蒔く人々—

名取市における方言による社会活動の記録と継承

—方言を絶やさないために種を蒔く人々—

櫛引 祐希子

1 名取市で活動する「方言を語り残そう会」が迎えた3つの試練

2009〈平成21〉年に創設された「方言を語り残そう会」が最初に迎えた試練は、2011年〈平成23〉年の東日本大震災でした。会員たちは全員無事でしたが、家族や知人を亡くし、大津波で変わり果てた名取の姿に深く心を痛めました。

名取を襲った津波は、震災の3日前に地元の小学校の児童に楽しんでもらった「名取方言かるた」の原版も呑み込みました。創設以来、会員が取り組んできた活動の痕跡がまさに水の泡と化したのです。

そうした中で、会員たちを奮い立たせたのは、未曾有の震災に負けまいとする精神力でした。そして、名取のために奮起する手段として、自分たちが幼い頃から慣れ親しんできた方言を選びました。閑上地区に居住していた多くの住民が暮らすこととなった美田園第一仮設住宅で方言による慰問活動を始めたのは、まだ津波の傷跡が生々しく残っていた2011〈平成23〉年7月です。慰問活動の実施回数を毎月1回から隔月にする変更はありましたが、2018〈平成30〉年に仮設住宅が閉所するまで、「方言を語り残そう会」は被災者が集う仮設住宅の集会場で慰問活動を続けました。

その間も、震災を風化させないための方言句集『負けねっちゃ』(2011〈平成23〉年)、方言詩集『生きるっちゃ』(2013〈平成25〉年)、方言文集『忘ねっちゃ』(2017〈平成29〉年)を作成しました。創設当初は子どもを対象とした方言による昔話の語りや方言かるたの普及を活動の主軸に据えていましたが、東日本大震災が多岐にわたる活動のきっかけとなりました。

その後も、「方言を語り残そう会」は文化庁の事業に協力し、『声で残す方言詩集「生きるっちゃ」—大震災を乗り越えて—』(2018〈平成30〉年)、共通語引きの方言語彙集『声で残す名取のなつかしい方言集』(2019〈平成31〉年)、郷土料理を方言で紹介する『世界に発信！ 方言クッキン グー宮城県名取市の郷土料理ー』(2020〈令和2〉年)、『宮城県名取市の方言書簡集 会いたいっ ちゃ』(2021〈令和3〉年)など、精力的な活動を継続してきました。こうした活動は、『インタビ ューでふりかえる宮城県名取市の「方言を語り残そう会」の軌跡—東日本大震災を乗り越え、コロ ナ禍を生き抜くー』(2022〈令和4〉年)にまとめてあります。昨年は、大阪教育大学で美術を学ぶ学生たちと遠隔で相談を重ねながら、絵本で方言を紹介する『方言で知ろう！ 昭和の遊び—宮城県名取市・岩沼市—』(2024〈令和6〉年)の作成に関わりました。

また、最近は特殊詐欺（いわゆるオレオレ詐欺）防止の啓発活動を方言の寸劇で行っており、方

言による社会活動の幅を広げています。河北新報に掲載された「「孫の手」「方言」で特殊詐欺防止市と警察が注意呼び掛け＜名取ウイーク＞」(2021〈令和3〉年12月10日)では、市内の公民館主催の講座「いきいき教室」で約20名の高齢者を相手に、高館地区に伝わる民話「狐にバカされたおずんつあん」を基にした方言の寸劇が催されたことが紹介されています。

実は、特殊詐欺防止の啓発活動を始めた契機は、コロナ禍でした。会員たちの交流や市内での活動に制限がかかったコロナ禍は、「方言を語り残そう会」を活動休止に追い込んだ事態であり、会が直面した二番目の試練と言えます。コロナ禍を生きた会員たちの切なる声は、『宮城県名取市の方言書簡集 会いたいっしゃ』(2021〈令和3〉年)に掲載されています。

新型コロナウイルスの猛威が落ち着くのとは対照的に、「方言を語り残そう会」は再び息を吹き返しました。名取市のホームページで連載されている「移動懇談会」では、第5回の企画として名取市長が「方言を語り残そう会」による朗読劇を見学し、その後会員たちと懇談したことが報告されています(<https://www.city.natori.miagi.jp/site/mayor/1850.html>)。その記事は、こう締めくくられています。「見学後の懇談では、同会が来年、設立から15年となるので、この機に何かできないか。また会員の中に郷土料理に精通している人がいるので、活かせる場があればなどのお話をありました」。

しかし今、「方言を語り残そう会」は、三番目の試練に直面しています。それは会員の高齢化です。

2 方言の価値とその継承

年を重ねることは、悪いことではありません。逆境を乗り越え、生き抜いていく胆力は、年齢を重ねながら培われます。令和4年度文化庁の委託事業として私が取り組んだ報告書『年を重ねたからこそできる方言での社会貢献—「方言を語り残そう会」の場合—』(2023〈令和5〉年)のタイトルが物語るように、高齢者だからこそできる社会活動は少なくありません。

とはいっても、年齢が高くなるほど、心身の不調や気力の低下が生じやすくなるのも事実です。今までできたことができなくなるという不自由さや不便さと向き合わなければならなくなります。

残念ながら「方言を語り残そう会」も会員の高齢化に伴い、会員数が減少しました。東日本大震災が起きた当時は、方言による社会活動を通して被災地を盛り立てていこうとする気力が会員たちにはみなぎっていました。あれから干支が一周と少しまわった今、そうした気力があっても自由に体が動かせる会員の数は少なくなりました。この状態がしばらく続ければ、今まで名取で様々な実績を残した「方言を語り残そう会」の存続が危ぶまれる事態になりかねません。

ところで、本書の第一部で行った気仙沼市調査の報告で私が担当した「外国人に対する方言意識」で述べたように、世代が若くなるほど方言を使う相手は限られていきます。10代では家族や友人にも使わないという回答が目立ちました。言語の活力を測る基準は様々ありますが、どのような相手に使用するかというのも重要な尺度となります。若い世代が家族にも友人にも気仙沼方言を使わないのだとすれば、方言の活力は確実に衰退傾向にあると言えるでしょう。

もう一つ若い世代の意識で注目したいのは、世代が若くなるほど、方言をコミュニケーションに

支障をきたす言葉として捉える意識が高まることです。これについては上の世代の意識との間に温度差があることに注意を向ける必要があります。上の世代は、方言でコミュニケーション摩擦が生じることは十分承知しており、問題があれば共通語で対応するつもりでいます。つまり、共通語だけでなく方言の使用にも積極的な姿勢がうかがえます。それに対して若い世代は、方言を使うメリットをあまり感じていないようです。通じない言葉である方言を使うよりも、通じる言葉である共通語を使った方が話し手も聞き手も気まずくならないという意識がうかがえます。

以上は気仙沼市で行った方言調査の結果ですが、名取市でも同様のことが起きているかもしれません。つまり、上の世代は地域住民の繋がりを深める言葉として方言の価値を認めていても、若い世代にはそういう認識がないということです。もちろん、若い世代の中にも上の世代のように方言の価値を認める人もいるでしょうが、それが少数派である限り、どれほど方言の継承に力を入れても若い世代で方言の使用は先細りになっていきます。

逆に言えば、方言の継承を実らせるには、地域の連帯感を育む方言の価値を若い世代が認識できるようなきっかけが必要です。そういう意味で、「方言を語り残そう会」が心血を注いできた活動を検証することには、一定の意味があると思います。なぜなら、「方言を語り残そう会」が行ってきた活動は、方言が人と人を繋げ、孤独感を癒し、明日を生きる活力となることを体现してきたものばかりだからです。「方言を語り残そう会」が刻んだ足跡には、方言による社会活動が地域社会に何をもたらすのかということを探るいくつもの手がかりがあるように思えます。

そこで、今回、「方言を語り残そう会」の方言による社会活動を 3 つの視点から捉え直すことにしました。

1 つ目は、東日本大震災後の「方言を語り残そう会」の方向性に深く関わった元美田園第一仮設住宅自治会長の高橋善夫さんの視点です。高橋さんは震災で奥様とお子様ご家族を亡くされました。失意のどん底で出会った新聞記事の言葉に突き動かされ、「生かされた生命」を自覚して被災者に奉仕する道を選び、2018 年に閉所するまで仮設住宅の自治会長をされました。

2 つ目は、東日本大震災後の活動を代表する特殊詐欺防止の啓発活動を協働で実施する名取市市役所市民協働課の視点です。現在、市民協働課が把握している限りでは、市民活動団体は令和 5 年度末で 108 団体あります。多様な主体である市民活動団体が行政側と協働して街づくりをしていくというのが市としての計画ですが、「方言を語り残そう会」と関わるようになったきっかけは、会の活動を中断せざるを得なかったコロナ禍でした。

そして 3 つ目は、「方言を語り残そう会」の会員の視点です。ただし、会員自身が会の活動を振り返る企画は、『インタビューでふりかえる宮城県名取市の「方言を語り残そう会」の軌跡—東日本大震災を乗り越え、コロナ禍を生き抜く—』(2022 〈令和 4〉年) で行ったので、今回は少し目線を変えました。当事者である会員が自分の経験として会の活動を語るのではなく、第三者に会の活動を伝えるとしたら、どのような言葉でどのように語るのかという点を知りたいと考えました。そういうことで、会員たちが会の活動を客観的にどのように評価しているのかがわかるからです。

元美田園第一仮設住宅自治会長の高橋善夫さん、名取市市役所市民協働課課長浅野美保子さんと

課長補佐兼男女共同・市民生活係佐藤理恵さんには11月にインタビュー調査を行いました。「方言を語り残そう会」には12月から1月にかけて葉書を用いたアンケート調査を実施しました。

3 元美田園第一仮設住宅自治会長から見た「方言を語り残そう会」

元美田園第一仮設住宅自治会長の高橋さんは、震災前から「方言を語り残そう会」の前会長の金岡律子さんご夫婦をご存じでした。市役所にお勤めされていた國男さんとは公民館の活動等で関わっていらっしゃったということです。また、その奥様の律子さんが語る方言の民話に触れる機会もあり、震災前の閑上でも僅かですが交流があったそうです。

東日本大震災で奥様とお子様ご家族を亡くされた高橋さんにとって、震災から2カ月間は失意の毎日でした。しかし、ある日、新聞記事で目にした言葉「どんな悲惨な惨たらしい災難にあっても、生き延びる運命を持っているものは、そこから逃れ出られる」に心を動かされ、同じ被災者の生活に奉仕したいと思われたそうです。「生命」という題の新聞記事が、まさに高橋さんに新たな命を吹き込んだと言えるかもしれません。

自治会長を務める仮設住宅では、回覧板を廃止しました。その代わり集会場に行事予定表を設置することで、居住者たちが自然と交流できるような仕掛けを作ったそうです。さらに、あえて行事予定表に詳しいスケジュールを書かないことで、居住者に謎かけやサプライズを用意したそうです。ちなみに、この行事予定表は津波で流されてきたものを再利用しました。奇しくも津波を耐え抜いた行事予定表が、震災後の仮設住宅の暮らしを支えたのです。

「方言を語り残そう会」との関わりは、震災前に交流のあった金岡さんが高橋会長を訪ねてきしたことから始まります。金岡さんは、完成したばかりの美田園第一仮設住宅で「方言を語り残そう会」による慰問活動を定期的に行うことを提案しました。

高橋会長は「こちらもお世話になったけれど、利用もされた」と懐かしそうに笑います。「方言を語り残そう会」が作成した方言句集『負けねっっちゃ』、方言詩集『生ぎるっっちゃ』、方言文集『忘ねっっちゃ』に多くの作品を寄せたのは、仮設住宅の居住者たちでした。さらに『生ぎるっっちゃ』の冒頭には高橋会長が寄せた文章と「生ぎる」という題の詩が掲載されています。

「方言を語り残そう会」の慰問は毎回面白いだけでなく、リラックスできるものだったと高橋会長は話します。さらに「自分たちの街にこんな話題があったのか」と発見することもあったそうです。慰問の会場だった集会場には手芸、ダンス、カラオケ、民謡、麻雀など様々な趣味の居住者が集まっていましたが、「方言を語り残そう会」とみやぎ生協の有志が集まって催す慰問活動が最後まで続いたとのことです。「お客様目線でちゃんとやっていた」というのが高橋さんの感想です。

高橋さんがとりわけ印象に残っているのは、集会場で行った仮装カラオケ大会です。「方言を語り残そう会」が企画し、進行は方言で行われました。会員だけでなく居住者たちも思い思いの仮装をして自慢の歌声を披露しました。高橋さんも仮装して歌い、仮装カラオケ大会は大盛況で幕を閉じました。

高橋さんにとって閑上の方言は、他の地域の人が聞けば怖い印象を持つかもしれないが、自分

にとてはやさしくて、周囲を和ませる温かさのある言葉です。そんな高橋さんは、日和山町内会の事業で造られた石碑の文言について、こう提案しました。「からぶっても　いいんでねえの　たすかれば」。

「からぶっても」とは、野球用語の空振りのことです。つまり、危険を察知して逃げてはみたものの、実際は大したことがなかったというのを「からぶっても」で表現しました。「からぶっても　いいんでねえの　たすかれば」に込めた思いは、どんな結果にせよ、危険を感じたら自分の命を優先するのが一番大事だということだそうです。心から発せられた思いは、方言でしか表現できなかつたと高橋さんは語ります。

高橋さんにとって、閑上弁は自分を奮起させる言葉でした。そんな閑上弁を操る会員がいた「方言を語り残そう会」は、閉所する直前まで仮設住宅での日々を共に盛り上げた戦友のような存在なのかもしれません。

4 名取市市役所市民協働課から見た「方言を語り残そう会」

交流や移動が制限されたコロナ禍においても特殊詐欺等の犯罪はあるため、消費生活に関する啓発活動を止めることはできません。そこで、市民協働課は、密閉・密集・密接を避け少人数であれば実施が可能な出前講座に力を入れることにしたそうです。映像媒体を利用した座学形式の出前講座では新鮮味がなく手詰まり感を抱いていた時、「方言を語り残そう会」も活動範囲が制限されたことに意気消沈していることを知り、協働で出前講座をしてみないかと声をかけたとのことです。

「方言は若い人にはなかなか難しいが、高齢者には相性が良い」という点を踏まえ、会の強みである方言による語りを最大限に活かす方法を検討したそうです。その結果、人が狐に化かされる名取の民話を思い出し、こうした民話をを利用して詐欺の事例を扱った寸劇をするというアイディアが生まれました。今も昔も人が騙される話があったということが、「方言を語り残そう会」が特殊詐欺防止の啓発活動に関わる端緒となったわけですが、その背景には「方言を語り残そう会」の創設当初に想定していた方言による民話の語りの普及が関係していたことは間違ひありません。

方言を用いるとなると、活動の場所や相手に応じてやり方を変える必要があります。名取では雑煮に入る具材にも地域差があるそうですが、地域による方言の違いも比較的明確な地域です。昔ながらの住民が多いところでは古い方言が根づいていますが、新興住宅地では方言の使用は制限されるそうです。ですから、「方言を語り残そう会」は、出前講座に赴く地域についての知識をあらかじめ持っておくよう努めていると言います。

令和5年度は、34回出前講座があったうちの4回が「方言を語り残そう会」との協働で実施されました。協働で行う際は、出前講座の名称に「笑って学ぶ方言版」が付け加えられます。出前講座自体は無料ですが、移動費などを踏まえ「方言を語り残そう会」には謝金を用意しているそうです。なお、「方言を語り残そう会」の参加メンバーが少ない場合は、協働で出前講座を実施する市役所の職員が代替として参加します。

今後、行政側として方言を語り残すためにしている活動について尋ねたところ、図書館の取り組

みが話題となりました。現在、「方言を語り残そう会」に関する記録・資料は図書館が管理しています。ただし、方言は郷土芸能や郷土の文化芸術という位置づけではないため、郷土に関する資料として保存することになるそうです。また、図書館は映像による記録に取り組む企画を立てているそうです。「状況に応じた方言の使い分けが分かる」ということで、音声による記録よりも多様な視覚情報を含む映像による記録の可能性を重視する様子がうかがえます。

「方言を語り残そう会」は「求めているところはどこなのか、求めているところと自分たちを繋げてほしい」と市役所にリクエストしているそうです。そういう意味で「地域を俯瞰できる自分たちは、つなぎ役である」と市民協働課の浅野さんと佐藤さんは行政の立ち位置について語ります。

そんなお二人から見ると、「方言を語り残そう会」は、会員たちが互いに思いやりを持って活動し、常にパワーをくれる団体だそうです。そして、高齢の会員たちについて「地域で生きていく上でのロールモデル」という印象を抱いています。

お二人は、将来自分が「方言を語り残そう会」の会員の年齢になった時、どのように活動できるのかと自問自答されるそうです。「方言を語り残そう会」を13年間見てきた私も全く同感です。やや大げさな表現ですが、「方言を語り残そう会」は、老いた先にある人生に不安を抱く者にとって進むべき方向を指し示す道標のような存在です。

5 方言による社会活動という種蒔き

では最後に、「方言の語り残そう会」の会員たちが、会の活動についてどう考えているのか、また方言についてどのような意識を持っているのかという点を確認しましょう。今回、以下の図を示し、「方言を語り残そう会」に調査協力を依頼しました。

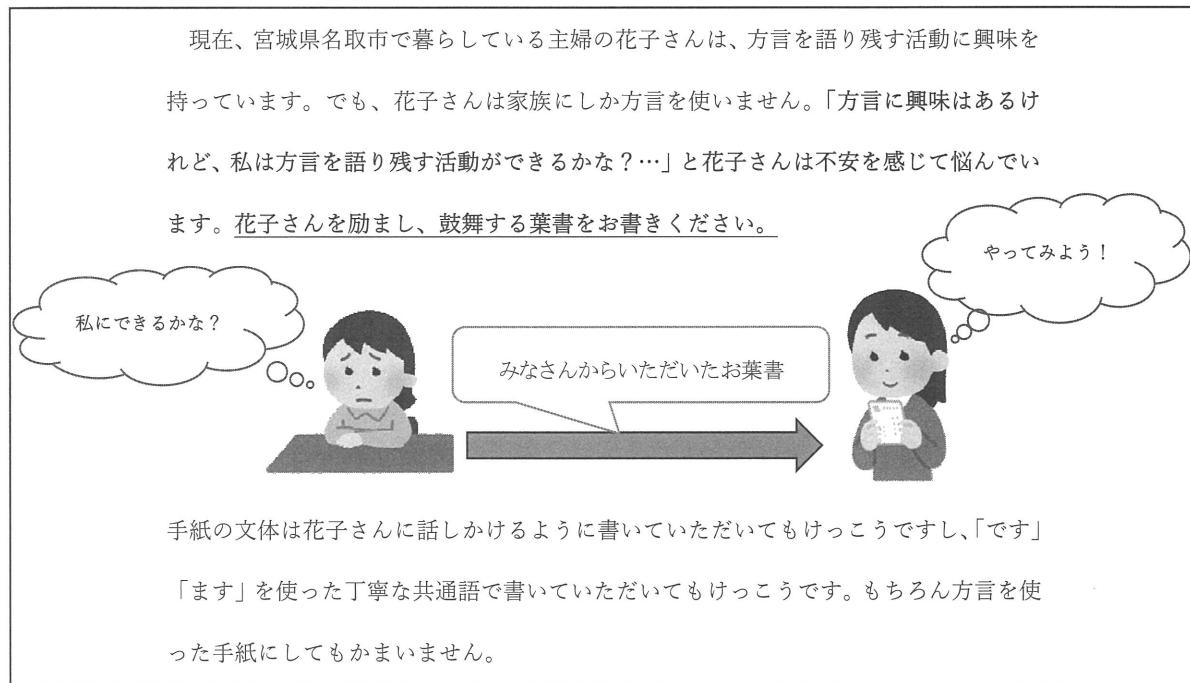


図 方言による社会活動への参加に躊躇する花子さんに送る手紙の説明

方言による社会活動に关心を寄せながらも一歩踏み出せないで立ち止まっている人の心を動かす、そんなメッセージを葉書の上で紡いでもらうのが、このアンケート調査の趣旨です。。

通常のアンケート用紙にしなかったのは、花子さんに向けられるメッセージがアンケート調査に回答するような硬い書き言葉になってしまふのを回避したいと考えたからでした。結果的に、葉書に書かれたメッセージを拝読する限り、当初のねらいは達成できました。ただし、2名の会員からは葉書ではなく、便箋が届きました。花子さんを鼓舞するメッセージだけでなく、会の活動や方言への思いを葉書サイズに収められなかつたのではないかと思います。

では、会員たちがどのようなメッセージを悩める花子さんに宛てたのか、匿名でお一人ずつ紹介していきます。いただいた手紙に書かれていた表記をそのまま反映しましたが、明らかに誤字・脱字が分かる場合は、こちらで修正しました。また、必要に応じて補助記号を加えました。

Aさん

方言に興味をおもちでしたら、私たちの会へ入会お待ちしています。

同じ興味のある人とお話していると、自然と方言も出てくるし、思い出す言葉もたくさんあります。

今は方言を使う放送や本もたくさんありますので、注意して見ると楽しみも増えると思います。

暖かい温もりのある方言を多くの人達へ届けられたらすばらしいですね。

Aさんは共通語で語りかけます。同じ興味のある人と話することで思い出す言葉が多くあるというのは、会の活動を通してAさんが実感したことなのかもしれません。

Bさん

花子さんが方言には興味があるけど、活動できるか不安を感じているとお聞きして、お手紙を差し上げました。

不安になりますよね。私もそうでした。

方言について正しく知識もなく、自己流で使っていた私に、活動できるのかなという思いました。

花子さん、安心してください。

知識豊富な先輩、そして何より素晴らしい仲間が一緒です。

民話、紙芝居、かるた、朗読劇、たくさん活動があります。

花子さんにも、やってみようと思えることが見つかると思います。

一緒に学びながら、楽しい時間を作っていきましょう。

ぜひ一度、足を運んでみてください。

「花子さん、来てみてけさい。待ってっかんね」

Bさんは自分自身も「方言を語り残そう会」への参加に不安があったという心情を吐露しながらも、他の会員たちと仲良く活動できる「方言を語り残そう会」の楽しさを伝えています。

Cさん

花子さん、はじめまして。

花子さんが方言に興味を持っていることを知り、とてもうれしく、また親しみを感じました。

方言は昔から使われてきた大切な言葉なので、これを絶やす事なく、受けいれていく事が重要な事だと思ってます。

老人クラブ等の集まりに行って、お話しする事があるても、方言を使うとすぐに親しくなり、話が楽しくなります。

また、皆さんから方言を教えられる事がありますよ。そうすると、自分の子どもの頃が思い出され、昔の生活がなつかしく浮かんで来ますね。

花子さん、子どもたちにも、進んで方言を使って話してみてはどうでしょう。

子どもたちに本を読んであげる時、方言を入れてみるのもどうでしょうか。

きっと家族との話題になるかもしれませんね。

名取に「方言を語り残そう会」のグループがあります。

どうぞ花子さんの力を貸してください。

そして、私たちと一緒に活動していきましょう。

会員一同、あなたをお待ちしております。

Cさんは方言を継承する意義と気軽にできる継承活動を優しい口調で花子さんに紹介しています。最後から3行目の「力を貸してください」には、会員たちの高齢化に伴う会の活動の先行きを危惧しているよう様子が伝わってきます。

Dさん

答えになっかわがんねげんと、私はこう考えて、この会に入ります。

平成23年3月11日東日本大震災の時に被災した人たちの所にボランティアとして参加した時に感じたことは、言葉のあたたかさでした。

それも、方言で発した言葉でした。

「あんだ、生ぎでだが。いがった、いがった」

年配の人たちが方言でなぐさめ合っている姿でした。

思わず私も方言で返すと、お互いか通じ合ったような気がしました。

食料品や衣類はもちろんですが、それ以上に何もかも失った人たちの心にひびいたのが、この方言です。

どんな物よりも優しくあったかい言葉が被災者の心に灯をともしたのです。

方言は、その地方に古くから自然な形で語り継がれてきた温かいぬくもりです。

どんなに時代が変わっても、長くふるさとを離れても、耳にしたら心があたたかくなる言葉です。

目に見えなくても、必ず心に残っていって人を優しく癒してくれる。それが生まれた土地の方言です。

新しい時代になっても、このなつかしい響きを形として残せたらと思っています。

震災後、徐々にこの方言が見直されてきました。

方言を覚えるには、昔語りをしている人の講演に出向いたり、方言を使った本などがあります。

私たち「方言を語り残そう会」は、方言を使った「かるた」「紙芝居」「昔遊び」、最近は「朗読劇」をしながら、小学校や老人施設、町内会等にまねかれて、それぞれの分野で活動しております。

参考になったべが！

Dさんは東日本大震災直後の様子を伝えることで、語り継ぐべき方言の価値について花子さんに語ります。最後の一文だけ方言を使うことで、方言だからこそ伝わる思いを表現しています。

Eさん

生まれた土地の方言は、自然に会話として耳に入って、相手の記憶に残るものです。

だから、無理に「方言」を残そうとは考えず、日常生活に普通にある言葉なので、自然体で使っていて下さい。

それが語り残すことに繋がっていきますから。

だってほら、「あー、ばあちゃん昔よく言ってたな」って記憶にあるでしょ！

花子さんの気持ち、よくわかります。

私もそうでしたから。

家では日常会話が方言なのに、一歩外に出たら恥ずかしいって思っていましたから。

私はずっとばあちゃんから地域に伝わる昔話などを子守歌変わりに聞いて育ちました。

幼い頃の私の頭の中には、その物語一つひとつの画像が浮かんでくるんです。

それはそれは本で見るよりリアルで興味津々でした。

なぜなら、同じ本からでは味わえない「その方言の語り口調」は、その人の言葉がストレートに、まるでその場に居たかのように伝わってくるんです。

言い換えれば、本や絵本で見る物語は絵のままであるが、方言語りは「方言」というやさしい響きや語る人の思いが重なり、聴く人がそれぞれにイメージして記憶の中でいつまでも残つていくのです。

東日本大震災以降は特に「方言の力」に救われました。

「同じ言葉をしゃべる人が傍らにいる安心感」「故郷が言葉として生きていることを実感する」。そんな場面を幾度も目に耳にしてきました。

あんなに恥ずかしいと勘違いしていた生まれた土地の方言は、人と人をつなぐ一番大事な言葉であり、たとえ故郷を離れてしまっても「大切な地元の方言」をしゃべる自分自身が故郷そのものなんだと感じています。

懐かしく、そして優しい家族の思い出がたくさん詰まった方言を、自分の中で少しずつ発信していくだけで十分伝わるものですね。

方言だの共通語だの区別するのではなく、自然と出た方言が笑顔や笑いと共に相手に伝われば、それでいいんですから。

Eさんは、無理に方言の継承を目指すのではなく、日常生活の中に方言を語り残すための行動が

あると言います。また、東日本大震災の前後で方言に対する認識が変わったと述べています。

Fさん

花子さん、私も●●生まれで、地方の言葉でしゃべっていたが、ある日、友人と話している中で、「あれ？ 今、何しゃべっているんだ」と相手の会話に引きよせられました。たとえば、「んだば、お願ひすっかなあ」「おしょすいから、あんまり写真撮らねでけさいん」「んだっちゃね」と会話を進めていくようにしています。

花子さん、旅ばきを付けて、いっぺえ思い出作ってきてけさいん。

そして、帰ってきたら、楽しい思い出話をお茶っこ飲みながら聞かせてもらえばうれしいっちゃね。

何げなく会話する事が心の安らぎになると、その時々でいろんな使い方があっからしゃ。その人にあった使い方で相手も空気を読んでけんできえすか。

方言だからと気負いする必要はないように思います。

方言大好きです。

Fさんは、自分自身が方言の面白さに気づいた経験を紹介しています。そして、花子さんの悩みを旅に見立て、自分の中の方言を見つけるよう励します。

Gさん

今度、お茶っこ会しねすか。

方言も入っけど、わかんなくともいいんだ。

とってもおもせし、癒されっと。

おらいで漬けだおごごもっていっからっしゃ。

お茶っこすっぺね。

Gさんは、「とってもおもせ（とてもおもしろい）」と「方言を語り残そう会」を紹介します。また、「お茶っこ会」は茶話会のことであり、茶話会には「おらい（自分の家）」で漬けた「おごご（漬物）」を持って行き、「お茶っこすっぺね」と花子さんを会の活動に誘っています。

Hさん

何、悩んでんの？

方言？ 方言はいいぞ。 人の心に届く言葉ではねえが。

何 笑われる……いいんでねえが。

笑いには人を元氣にする力がある。

方言はいいぞ。

がんばれ！

Hさんも方言でメッセージを紡ぎました。「方言は人の心に届く言葉ではないか」と、確認を促すような口調で方言の力を主張します。また、方言が笑われる言葉であることを逆手に、「笑いには人を元氣にする力がある」と力説しています。

こうしてみると、方言でメッセージを書いたGさんとHさんは、迷う様子なく花子さんを「方言を語り残そう会」に誘っています。それは、お二人が書いているように「方言を語り残そう会」の活動の面白さや方言の力を心底感じているからでしょう。

共通語で書かれたメッセージには、方言による社会活動に参加するかしないか思い悩む花子さんに共感する声が寄せられています。また、かつての自分の姿を重ねるものもいくつかありました。

東日本大震災以降、仮設住宅で慰問活動に励み、出前講座で特殊詐欺防止の啓発活動を展開している「方言を語り残そう会」の会員たちの様子からは、こうした活動に対する苦悩や躊躇の片鱗を見ることがありませんでした。ただ前だけを見て、パワフルに進んでいる印象でした。

しかし、実際は、自分たちの活動がどのように見られているのか、どのように受け止められているのか、そして、そもそも自分はどうしたいのかということを熟慮しながら、進んでは戻り、戻つてはまた前に進むというのが、「方言を語り残そう会」の本来の姿だったようです。

仮設住宅で慰問活動を受け入れた高橋さんが話す「お客様目線でちゃんとやっていた」というのは、自分たちの活動を客観視し続ける「方言を語り残そう会」の姿勢を端的に表したものでしょう。また、特殊詐欺防止の啓発活動を行う名取市市役所市民協働課のお二人は、活動の後、「方言を語り残そう会」が毎回反省会をしていることに感心していました。こうした姿勢が、「方言を語り残そう会」が展開する方言による市民活動の質を保証し続けてきたと考えられます。

これから先の方言の未来は決して明るいものではありません。その結果、方言を次世代に繋げていく継承活動があちらこちらで行われています。こうした活動一つひとつに何らかの意味があるのは間違ひありません。ただし、若い世代が伝わらない言葉として方言の使用を控えていることを踏まえると、垂れ流すように方言を伝え残すだけでは限界があります。今、方言の継承に必要なのは、継承の方法を探ることよりも、原点に立ち返り、何のために方言が必要なのかということを明確に

若い世代に伝えていく努力かもしれません。

方言が人と人を繋ぎ、孤独感を癒し、前向きに生きる力を与えてくれる言葉であることを信じ、活動を続けてきた「方言を語り残そう会」は、方言による社会活動の中で、方言の価値も上げようとしてきました。方言が廃れ行く今、それは荒野に種を蒔くような行為かもしれません。

けれども、東日本大震災で深い悲しみに陥った自分たちの足元を支え背中を押してくれた方言を、このままで終わらせないという気概で、「方言を語り残そう会」は方言による社会活動という種蒔きを続けようとしています。

その種がどんな花を咲かすのかは誰にもわかりません。けれども、自分たちが方言に救われたように、いつかどこかの誰かを救うはずだという強い信念を抱き、目の前にある高齢化という第3の試練に立ち向かおうとしています。

「方言を語り残そう会」の冒険は、会員以外の人たちも巻き込みながら、続していくようです。

あとがき

本書には、文化庁の委託事業における宮城県のこれまでの記録作業の方針を引き継いで行った2024年度の調査研究の成果がまとめられている。これまでにってきた事業で掲げてきた被災地の方言の記録に必要な取り組みは、以下の3点である。

- (1) 日常の言語生活を髣髴と再現するような会話集の作成
- (2) 未開拓な分野、特に、オノマトペ、感動詞、言語行動などの記述
- (3) 広い範囲の方言の状況を把握するための地理的分布の記録

今年度の取り組みも、この指針に沿って行ったもので、以下でその重要性を確認するとともに、今後の発展的な展開についても私見を述べることで、本書のまとめとしたい。

(1) については、この文化庁の委託事業の支援を受けて、2012年度以降、東北大学日本語学研究室に並置される東北大学方言研究センターが宮城県気仙沼市方言と名取市方言を対象に取り組んできた成果が存在する。しかし、会話量、記録地点ともまだ十分とは言えない状況であり、取り組みのさらなる拡張が急務と言える。さまざまな生活場面の中で、方言が実際どのように使用されていたのか、それを会話として残していくことは、被災地の方言を記録し、後世に伝えていくために非常に重要な課題となると考える。今後、宮城県の他地域での展開も必要となろう。

また、(2)は、ここ数年、日本語学研究室が注力して調査研究を行っているものであり、今回は世代別多人数調査を通して、昨年までの記述的な調査の成果を検証する形の内容で取り組んだ。これらの分野は、全国の方言の中でも東北方言に特徴が色濃くじみており、言語としての東北らしさが際立つ分野であると言える。その点で、被災地方言についての記録と特徴の導出は、今後も、オノマトペ、感動詞、言語行動、談話といった分野の調査に優先的に取り組む必要がある。

さらに、(3)の課題については、方言が面的な広がりを持つものであることを考えた場合、特定地点の記録だけでは不十分であるという理由に根差すものである。方言の記録に残された時間を考えたとき、1地点を掘り下げるだけでなく、同時に、広範囲に渡って地理的分布を把握する取り組みも行わなければいけないことは明白である。方言の記録にとって、記述調査と分布調査はいわば車の両輪であることを忘れてはならない。今年度の取り組みは1地点での多人数調査に留まったが、これを基軸に、いずれ調査範囲を広げ、今回の成果の位置づけを捉える必要もあるだろう。

本書の報告は、一定程度、これらの課題に応えるものであったと言える。さらに、今回は学外の専門家も多く招き、音韻、文法、語彙などの伝統的な分野の調査も同時に企画し、多人数調査で実態を捉えたことで、大震災を挟んで、長いスパンで気仙沼の方言がどういった変化を遂げたかという点での記録にも貢献できたように思う。これらの報告の一部からは、伝統的な方言の著しい衰退が窺える一方で、分野ごとの変化速度の差や方言と共通語の使い分けへのシフトなど、方言のあり方の変化を捉える貴重な知見が得られた。今後、なおその変化の実態を追うことが必要と言える。

そして、今回、企画した調査には、社会の中での方言の実相を捉える実践的な方言学の分野も存在した。未開拓という意味では(2)の領域とともにさらなる研究の進展が期待される分野である。これらの分野は、過疎化や少子高齢化、多文化共生社会化など、今後も変化が加速する地域社会の中で、方言学が社会とリンクし、その研究成果を社会に積極的に還元していく可能性を持つものと言える。今回の調査成果を踏まえて、そこに取り組むべき方言の問題が存在することが明確になり、東北大学方言研究センターが、これからも積極的に取り組むべき課題の1つだと再認識することになった。研究者としての私も、地域社会に暮らす一人であり、その地域を良くしたいという思いが

ある。地域社会を支え、豊かにするこれらの研究の展開が、専門性を活かした地域社会への還元に繋がることを、私自身も願ってやまない。

最後に、本書の刊行で、こういった一連の成果をひとまとめにした書を残すことで、全国の方言研究者・方言に関心を示す人々の注目を、お世話になった地域に少しでも集めることができたなら幸いである。

中西 太郎

* 1 いまだに復興の途上にある能登半島の方言を解説したパンフレット『支援者のための知っておきたい能登方言』は、東北大学方言研究センターが運営する「東日本大震災と方言ネット」(<https://www.sinsaihougen.jp/>) にて、データ配布を継続している。誰でもダウンロードして利用でき、2次配布することも自由である。以下にQRコードも示す。



文化庁委託事業報告書
東日本大震災被災地方言の記録・継承のための調査研究 3

2025年（令和7年）1月29日 印刷

2025年（令和7年）2月9日 発行

編者 東北大学方言研究センター

発行所 東北大学大学院文学研究科日本語学研究室

〒980-8576 仙台市青葉区川内 27-1 TEL 022（795）5988（代表）

東北大学大学院文学研究科
東北大学方言研究センター